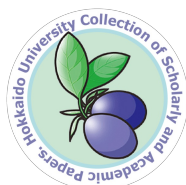




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	高校中退の軌跡と構造（中間報告）：北海道都市部における32ケースの分析
Author(s)	北大高校中退調査チーム
Citation	公教育システム研究, 10, 1-60
Issue Date	2011-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45111
Type	departmental bulletin paper
File Information	Kokochutai.pdf



高校中退の軌跡と構造（中間報告）

——北海道都市部における32ケースの分析——

北大高校中退調査チーム

— 目 次 —

第1章 本調査の課題	横井 敏郎
1 課題設定	
2 先行研究・調査と本調査の視点	
第2章 インタビュー調査の方法とケースの概要	伊藤 健治
1 調査の対象と方法	
2 ケースの概要	
参考資料 ケースの一覧	
第3章 インタビュー調査のケース分析	
1 家庭の状況とその影響	伊藤健治・津田紗希子・小林なつみ・家坂朱・笠島沙喜
2 学校経験と高校中退	市原 純・清原 健・池野 純
3 中退後の進路と生活	横関理恵・新谷康子・小坂恭平・倉田桃子・伊藤健治
4 ジェンダーによる差異	横井 敏郎・福岡 諒・福田 沙也佳
5 高校中退に関する当事者解釈	杉山 晋平・谷口 知弘・森田 清太郎
第4章 ある高校における中退状況の検討	市原 純・森田 清太郎
終章 中間総括	伊藤 健治
1 中間報告のまとめ	
2 今後の課題	

キーワード：高校中退、教育保障、階層、貧困、北海道

序章 本調査の課題

横井 敏郎

1 課題設定

戦後改革のもと、教育を受ける権利が憲法に規定された。6・3・3制が導入され、全国あまねく小中学校が設置されるとともに、高校も高度経済成長と国民の高い進学熱を背景に、急速に普及を遂げていった。しかし、1990年代以降、経済グローバル化と雇用の規制緩和、産業構造の変化、少子高齢化などによって社会状況は大きく変化している。わが国社会は、中間層に厚みをもった「中流社会」と言われたような状態から、中間部分がそぎ落とされた「格差社会」へと変わり、子どもと学校の抱える多様な課題の背景にも格差と貧困の存在が指摘されている。物質的には豊かである現代日本において、子どもたちの就学保障が教育課題となるというパラドキシカルな事態が生じているのである。そこで私たちは今回、教育を受ける権利が阻害されている事態の1つとして高校中途退学を取り上げ、調査することとした。

高校進学率は1974年には90%を超え、その後も高校進学率は微増を続けている。また高校中退率は、この20年余りの間、ほぼ2%台前半で推移しており¹、高校教育を受けられない者が急増しているわけではない。しかし、ある研究では、文部科学省の示す高校中退率は2年生、3年生のそれがその下の学年で退学した者を除いて計算されるために、低く算定されることとなっており、実際には7~8%が高校を卒業できていないという²。一般に高校中退が本人の望んだものではなく、なんらかの困難の結果であると見なされるが、そうであるとすれば、この数字はけっして見逃してよいとはいえないであろう。

ところが、高校中退が生み出される構造とプロセスについては、これまでそれほど多くの調査・研究が行われてきたわけではない。わが国の高校進学率は国際的に見てもきわめて高く、経済成長のもとで若年者の失業率も非常に低かったため、ドロップアウトがかなり前から問題化してきていた欧米に比べて、それへの関心は強くはなかった。一部のジャーナリズムや教職員組合運動などが高校中退問題について警鐘を鳴らしてきたが、教育行政も教育学界もこの問題をそれほど熱心に取り上げることはしてこなかった。しかし、高校中退自体は以前より存在していたが、「中流社会」から「格差社会」へと変わる中で、あらためてその内実を問う必要が生じている。

2 先行研究・調査と本調査の視点

(1) 国の調査

高校中退については、文部科学省が主に人数、比率と理由に関する簡単な調査を毎年実施、公表している。それによると、高校中退の比率は、この20年余りの間で、最も高いときでも2.6%であり、2009年度には初めて2%を切って1.7%となった。その「事由」の内訳は(2009年度)、学校生活・学業不適應が最も高く39.3%、次いで進路変更32.8%、以下学業不振7.5%、問題行動等5.5%、家庭の事情4.5%、病気・けが・死亡4.0%、経済的理由2.9%、その他3.4%となっている³。しかし、この調査は主たる理由を1つ選択するという方式で学校が回答するものであり、本人の回答の集計ではない。すでに指摘されているように、高校中退はこれらの理由が複合して生じると考えるのが自然であり、これで高校中退の要因を明らかにすることは難

¹ 文部科学省「平成21年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」

² 青砥恭『ドキュメント高校中退——いま、貧困がうまれる場所』筑摩書房、2009年

³ 注1に同じ。

しい。

内閣府は、高校中退者と中学校不登校生徒の進路状況や必要な支援を把握するため、2008年に文部科学省の協力を得て緊急調査を実施している⁴。これは高校中退理由について複数回答を認めており、結果は「高校の生活があわなかったから」が最も高く 49.4%、「人間関係がうまく保てなかったから」23.2%、「高校の勉強が嫌いだったから」20.8%、「授業についていけなかったから」18.5%、「進級できなかったから」16.7%が上位を占める。文科省調査と異なるのは、学校生活不適応が高く半数の回答者がこれを選択していること、進路変更が11.9%と低いこと、それに代わって人間関係の問題が上位に出てきており、また学業不適応、学業不振に相当する回答比率も高いことである。またこの調査では、中退後の進路動向や支援ニーズも問うており、有益な内容を含んでいるが、アンケートという調査の性格のためにやはり中退理由の複合性やプロセス、その後の軌跡等がはっきりしない面が拭えない。

（２）先行研究

数多のドロップアウト研究が刊行されている欧米と異なり、わが国では高校中退研究は多くない。ここでは紙幅の関係もあり、本稿に必要な限りで代表的な2つの文献に触れるに止めたい。

1つは、清田・黒崎の研究⁵である。これは1970年代以降の東京都の高校中退動向の検討を通じて、高校中退を積極的な進路の修正・選択と捉える楽観的な教育論、および高校中退理由を「問題行動」と「学業不振」に求める先行研究を批判したものである。それによると、東京都の高校中退動向は、①1970年代後半から全日制普通科で増加している、②中退理由は学校生活不適応と進路変更が大きな比率を占めるようになる、③中退を生み出す高校は底辺校だけでなく偏差値ランクの高い学校も含んですべての学校にわたっている、④しかしまた中退を多く生み出しているのは偏差値序列の下位校であり、中退率と偏差値序列に相関がある、といった変容が見られると言う。そして、これらのことから、高校中退は「偏差値レベルに象徴される高校教育の序列的構造という制度要因」に大きく規定されたものであると同論文は主張している。

いま1つ取り上げたいのは、青砥の著書⁶である。青砥は長年の高校教員の経験を踏まえて、多数のケースを紹介し、また統計的データも用いて、高校中退者のほとんどが「日本社会の最下層で生きる若者たち」であると述べる。貧困家庭の子どもの進学先はいわゆる底辺校に集中しており、そこから多数の中退者が生まれていることから、高校中退は家族の貧困が最大の原因であると主張している。また同書は、単に所得の貧困だけでなく、低学力、学習意欲の欠如、基本的な生活習慣の訓練の欠如、人間関係の未成熟、アディクション、親からのDV・ネグレクト、貧困層の囲い込み政策（学区撤廃と選択制）を列挙して、これらの複合によって高校中退は生じているとしている。

清田・黒崎は、先行研究の1つに小林の著作⁷をあげ、小林が1970年代までの高校中退が心身上の問題、非行問題、家庭の経済的な理由のいずれかによるものであったのに対して、1980年代の高校中退が質的に多様化していると正しく指摘しながら、結局はその原因として学業不

⁴ 内閣府政策統括官（共生社会政策担当）「高校生活及び中学校生活に関するアンケート調査（高等学校中途退学者及び中学校不登校生徒の緊急調査）」2009年3月

⁵ 清田夏代・黒崎勲「高校中退問題の動態と変容—明るい中退論批判」『教育学年報8 子ども問題』世織書房、2001年

⁶ 注2に同じ。

⁷ 小林剛『高校中退——克服のカルテ』有斐閣、1987年

振、不本意入学、問題行動をあげるにとどまっていると批判している。これを見ると、清田・黒崎は家庭の経済的な理由を本質的な問題として見ていないようである。

とするならば、清田・黒崎は家庭の貧困を主因と見る青砥とは異なる見解ということになる。青砥は、今日の高校教育のあり方の問題として貧困層の囲い込み政策を挙げており、清田・黒崎の指摘する「高校教育の序列的構造という制度要因」を否定しているとは言えない。しかし、青砥は、それよりも家庭の貧困を本質的な要因として捉えている。これに対して、清田・黒崎は、高校中退と偏差値序列の相関を重視し、序列下位にある高校から多数の中退者が出ているという現象に注目しているものの、議論は高校教育の制度的問題に帰結し、そこから家庭の問題にまでは視野を及ぼそうとはしない。

確かに、貧困家庭の生徒すべてが高校を退学していくわけではない。生活保護や授業料免除、奨学金など、一定の支援制度もある。また困難にある子どもでも、高校側の関わり方で退学するか否かは変わって来るであろう。そういう意味では、中退問題を考える際に、高校教育のあり方を検討の俎上に載せることは不可欠といえよう。しかし、いったいどのような生徒が退学していくのかを考えるには、やはり家庭やその子どもの抱えている困難に目をやらざるを得ない。とりわけ近年の社会状況の変化を踏まえると、高校中退がそれとどのような相関をもっているのかを丁寧に検討する必要がある。

（３）本研究の視点と方法

以上のような２つの文献の検討から、高校中退研究の課題の１つは、高校中退と家庭の所得階層あるいは貧困との相関をより明確にしていくことにある。その点では、高校中退と貧困の関係を重視する青砥の著書は重要な位置にあるが、それは一般向けの新書として書かれており、そこで紹介されているケースが現実には生起している高校中退の中でどのような位置、比重をもっているのかは必ずしも明瞭ではない。

また、青砥が貧困だけでなく、要因の複合によって中退が生じるとしている点も重要であり、複数の契機が関わってどのようなプロセスを通じて中退にいたるのかを明らかにしていく必要がある。子どもの貧困について調査研究を行っている阿部は、所得の貧困と社会的排除の概念を区別し、大人の貧困な生活は子どもの時の貧困だけで決まるのではなく、不利の積み重ねを通じて生み出されるとしている⁸。この指摘は、貧困という状態に至る“プロセス”に注目する必要があることを意味している。高校中退という事態を把握するには、それが生起するプロセスに注目しなければならない。高校教育制度の問題もこのプロセス分析の中でその位置を明らかにされるべきであろう。

さらには、中退に至るプロセスだけでなく、中退後の軌跡についても検討を加える必要がある。その後の軌跡まで含めて捉えなければ、中退という事態は把握できないであろう。中退という経験をした人が、それをどう意味づけ、その後の人生をどう作っていつているのかを明らかにすることは高校中退把握にとって不可欠である。またどのような支援が必要なのかを考えるためにも、中退後の軌跡を調べることは重要である。

そこで、私たちは高校中退経験者を対象にインタビュー調査を行うこととした。インタビュー調査は、対象者の調達という点で限界がある。十分な量の対象者を無作為で抽出することは、高校中退者の場合、非常に難しい。またインタビューは、当事者の語りの構築性という限界をまぬがれない。しかし、アンケートは調査の客観性は保ちやすいが、プロセスの把握という点

⁸ 阿部彰「日本における社会的排除の実態とその要因」『季刊・社会保障研究』Vol.43No.1、2007年

では逆に難しさがある。当事者が経験したプロセスを明らかにするための質的調査の方法として、インタビューは必要な方法の1つであると考え。以下、調査結果について報告する。

第2章 インタビュー調査の方法とケースの概要

伊藤 健治

1 調査の対象と方法

本調査の対象は、北海道の都市部（札幌及び旭川の近郊）に暮らしている高等学校中途退学経験を持つ若者たちである⁹。調査対象の性質として、高校中退後に一定の期間を経た者を捕捉することは難しく無作為抽出による調査は困難であるため、本調査の目的に鑑みて、多様な対象者を集めるために以下の複数の方法によって対象者を選定した。（i）中退経験者と関わりがある若者サポートステーションや高等部を持つフリースクール、さらに複数の高校教諭に依頼して協力可能な対象者の紹介を受けた。また、この方法で捕捉できない幅広い対象者を集めるため、（ii）インターネットのSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）を利用して、高校中退に関連したコミュニティへの書き込みにより対象者を募集した。その他に、（iii）インタビューを実施した対象者や調査メンバーの知人から協力可能な対象者の紹介を受けた。また、候補者との連絡は電話やメールによって行ったが、調査協力への承諾を得ながら途中で連絡が取れなくなることや、調査日時が確定しながらも当日の会場に現れない場合も多くあった。以上のように、本調査のサンプルの代表性には留意が必要であるが、高校中退の現実を捉える上で質的に意義にあるデータであると考え。なお、調査方法については以下のとおりである。

【方法】個別面接調査（半構造的インタビュー調査）

【所要時間】1時間30分程度

【場所】大学、フリースクール、児童会館、サポステ、ファミレス、喫茶店等

【期間】2010年5月26日から2010年9月10日

【調査内容】主なインタビュー項目は以下のとおり

- A. 導入：基本的な属性、家族構成、高校入学まで
- B. 中退理由・経緯：中退理由、高校生活、家庭状況と生活経験・学校経験
- C. 中退後の状況：中退時の展望、中退直後の意識と生活、次の進路、現在に至るまで
- D. 中退評価と支援：中退評価・再解釈、中退時・中退後に求める支援

【調査者の構成】北海道大学の教員（2名）、院生（6名）、学生（11名）¹⁰

【記録方法】インタビューの内容は、対象者の承諾を受けICレコーダで録音した。その後、インタビュー項目ごとに文字データ化した上で、ケースレポートを作成した。

2 ケースの概要

インタビュー調査の実施件数は33件である。このうち、高等専門学校を中退したケースが1件あったため、これを本調査の分析対象からは除き、32件（札幌市26件・旭川市6件）を

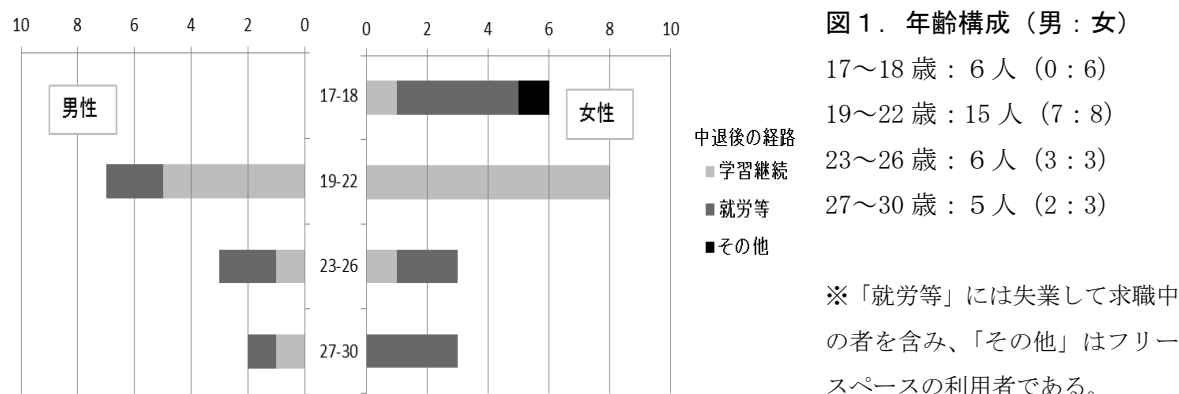
⁹ 本調査では、中退経験者に転学・編入した者を含め、年齢は概ね30歳までとした。

¹⁰ 学生は2010年度北大教育学部授業「教育行政学調査実習」として参加した。1人の対象者に対して1～3人の調査者が担当し、教員または院生（博士後期課程）が主たるインタビュアーとなり調査にあたった。

対象とした¹¹。各ケースの概要は資料1のとおりであるが、以下では本調査全体の概略を確認していく。まず、インタビューに至った経路をみると、(i) 15件(フリースクール6件、サポステ5件、高校教諭4件)、(ii) 4件(SNS経由)、(iii) 13件(調査者の知人経由10件、調査対象者からの紹介3件)であるが、中退経験者へのアクセス自体に難しさがあるため、何らかの形で紹介を受けたケースが多数を占めている。また、調査時点の状況としては、在学中11件(34%)、就労17件(53%)、その他4件(13%)であり、内訳は次のとおりである。なお、件数で比較すると、高卒資格を取らずアルバイト等の非正規雇用で働いているケース(10件)と私立大学に在学中であるケース(6件)の2つのグループが大きな割合を占める。

在学中：大学生6、専門学校生1、予備校生1、高校科目等履修生1、高校生2
就労：(高卒以上) 正規雇用3・非正規雇用3、(中卒) 正規雇用1・非正規雇用10
無職：求職中・家事手伝い3、フリースペース利用者1

次に、基本的な属性をみていく。性別では、男性12名・女性20名と女性が多い。年齢構成は以下のとおりで、19～22歳が最も多く、17～18歳は6件全てが女性であった。



また、出身地(出身中学校所在地)では、札幌市内18件、札幌隣接市3件、旭川市6件、その他道内市部3件、道内町村部1件、道外(北関東)1件であった。札幌近郊と旭川市以外の5件は、就学のために札幌に移転していた。

中退後の状況をみると、居住形態では、一貫して親(又は親戚)と暮らしているケースが20件、離家経験のあるケースは12件(理由は、就学4件・結婚2件・就労等6件¹²)であった。結婚歴があるものは4件(離婚1件)で、女性の3件全てが10代で出産を経験している。また、学歴では大学6件(全て在学中)、専門学校3件(うち在学中1件)、高校8件(うち高校在学中2件、予備校等で進学準備中2件)、高校中退15件であった。高卒資格非取得(在学中を除く)の15件における現在の状況は、就労中11件(正規1件、非正規10件)、無職4件(求職中2件、家事手伝い1件、フリースペース利用1件)であった。最も多くの割合を占める中卒・非正規での就労内容としては、コンビニ・スーパー等の小売店、ファミレス・居酒屋等の飲食店でのサービス業従事者が多い。その他では、男性で土木・建設関係、女性でホステスを経験している者が、特に就労期間が比較的長いケースにおいて特徴的にみられた。また、多く

¹¹ 高等専門学校は、中学校卒業後の早い年齢段階から専門教育を行う高等教育機関であるため、後期中等教育機関である高等学校と同様に扱うことは適切ではないと判断した。なお、除いたケースは29番である。

¹² 住込みアルバイトや生活保護との関係を含むため就労による自立とは捉えがたいケースが多くみられた。

のケースにおいて何度も転職が繰り返されていた。なお、非正規の就労者には 10 代で結婚・出産してパートで働く 2 名の女性も含まれている。

最後に、本調査におけるデータの偏りについてであるが、以上で確認してきたように、中退後に学習を継続して高卒資格を取得しているケースが、高校在学中も含めると 17 件（53%）と半数あまりを占めている。この理由としては、本調査でアクセスできた対象者が、現在の生活状況や社会的なつながりの面において比較的良好なケースが多いと考えられるほかに、高校中退の対象として「転学」「編入」を含めているためであると思われる。例えば、大阪府教育委員会が公表しているデータによると、中退後の「学習継続」は 14%程度であり、60%以上が「働く」であったが、同じ調査での「留年者数」における「年度内に転学した者」と「年度内に退学した者」の割合は同程度となっており、手続き上は「退学」にならずとも、高校を卒業せずに去っていく者の半数程度が別の高校等で学び直していると思われる¹³。本調査では、「転学・編入」を実態にあわせて高校中退の一部として扱うことが、高校中退に関する問題の実態を捉える上で、より適切であると考え調査の対象に含めている。その他に、年齢構成や男女比、就労状況などに関しても偏りがあると考えられるが、特に男性の就労者層が少ないことには留意が必要である。

本章では、調査方法とケースの全体的傾向を概観してきた。ひとまとめに高校中退といっても、中退経験者が抱える背景は複雑であり、中退後の状況も様々であることがわかる。しかしながら、家庭状況の困難さや不安定な就労状況などは特徴的な問題として現れており、さらに詳しく分析していく必要がある。次章では、いくつかの視点からの分析を試み、現時点での中間的な報告を行っていく。

¹³大阪府教育委員会「平成 21 年度中の府立高等学校（全日制の課程）における中途退学および不登校の状況」（<http://www.pref.osaka.jp/kotogakko/seishi/tyutai-hutoko.html>：最終閲覧日 2011 年 3 月 4 日）

参考資料：ケースの一覧

番号	男女	年齢	居住地	現在の状況	学歴	中退後の主な経路	中退校の学力的位置	高校所在地	主な中退理由	家計状況	父・職業	父・学歴	母・職業	母・学歴	兄弟姉妹	調査経路
1	女	18歳	札幌市	無職(フリースペース利用)	中卒	在宅で病氣療養→NPO(障害者支援組織)の活動に参加→フリースペース(アルバイト経験あり)	下位	札幌近郊	学校の対応(病氣)	やや厳しい(父親の失業経験あり)	会社員 土木業	高卒	専業主婦	不明	姉、弟	i
2	女	18歳	札幌市	福祉関係会社(正規雇用)	高卒	フリースクール・高等部卒→介護職(正社員雇用)	下位	札幌市内	友人関係、教師の対応	やや厳しい(専門学校進学を断念)	会社員 旅行業	高卒	パート	高卒	兄、妹	i
3	男	19歳	札幌市	公立定時制高校(3年生)	高校在学中	公立全日制高校再入学→同校中退→公立定時制高校再入学・アルバイト	下位	札幌市内	精神的ストレス(交際の相手との家庭問題)	厳しい(生活保護、障害者年金)	幼少期に離婚、再婚相手も死別	不明	事務職 休職中	不明	姉	i
4	女	23歳	札幌市	登録型派遣(バチンコ店)	高卒	アルバイト→フリースクール・高等部卒→登録型派遣(バチンコ店)	下位	札幌市内	友人関係(集団心理への戸惑いから校外の交友関係へ)	やや厳しい(親族の援助により編入)	会社員 小売業	大卒	パート	大卒	妹(中退)	i
5	女	20歳	札幌市	予備校生(看護系)	高卒	結婚・出産→離婚→アルバイト・高認取得・看護系予備校	下位	札幌市内	家計の困窮と父親の入院	厳しい(生活保護、父親は転職・病気で不安定)	無職(自動車整備など)	中卒、職業訓練校	パート	中卒	妹(休学中)	i
6	女	20歳	札幌市	アルバイト(スーパー)	高卒	フリースクール・高等部+高認取得→アルバイト(スーパー)	下位	札幌市内	友人関係(女子クラス)	厳しい(生活保護、学費の一括納入により中退後に制約)	中学生で離婚(中卒、自営・土木業)	不明	パート	中卒	—	i
7	男	30歳	札幌市	無職(若者サポステ利用)	中卒	アルバイト(短期→倉庫仕分け→中古CD・ビデオショップ)→無職(2年間)、若者サポステ利用	下位	札幌市内	友人関係(クラスに馴染めず)	比較的安定(父の失業、病気に数年前から家計が悪化)	無職(建具工)・通院中	中卒	パート	中卒	—	i
8	男	22歳	札幌市	私立大学(4年生)	大学在学中	フリースクール・高等部卒→大学進学	中位	釧路市	友人関係(人間関係の不得手)	やや厳しい(母親の3度目の結婚(中2)から経済的には安定)	実父は幼少期で離婚(現在の父は高卒)	不明	事務補助	短大卒	弟2人	i
9	男	22歳	江別市	私立大学(4年生)	大学在学中	フリースクール・高等部卒→大学進学(栄養系)	下位	札幌近郊	クラスでの嫌がらせ	安定的	会社員 燃料販売	高卒	パート	高卒	姉(中学不登校からニート状態)	i
10	女	20歳	札幌市	介護職(正規雇用)	高卒	公立定時制高校卒業→介護職(正社員)	下位	札幌市内	友人の影響で問題行動(母の介入で自主退学)	厳しい(働くため定時制へ、バイト代を家計へ入れる)	離婚	不明	自営業 飲食店	大学中退	妹	i
11	女	22歳	札幌市	歯科医院受付(正規雇用)	専門学校卒	予備校(看護系)→高認取得→専門学校(保育系)→幼稚園教諭(正規)→バイト(子ども服店)→保育園(パート)→歯科医院受付(正規)	下位	札幌市内	友人関係・学習意欲・教師への不信	不明(余裕はないと思われるが、中退等への影響はなし)	離婚	不明	正規(退職後パート)食品工場	高卒	兄、姉	iii
12	男	19歳	旭川市	土木・建設業(派遣等)	中卒	アルバイトなどの不安定就労(水筒売→運送業→派遣、解体業・農作業)	下位	旭川近郊	教員との関係(問題行動)	比較的安定	運転手(貨物自動車→送迎バス)	中卒	専業主婦	中卒	兄5人、姉4人、中退経験者あり	iii
13	女	22歳	札幌市	私立大学(4年生・休学中)アルバイト(ホステス)	大学在学中	通信制高校中退→高認(個別指導学習塾)→大学進学(心理系)・アルバイト(ホステス)	中位	北見市	担任の威圧的指導	安定的	レントゲン技師・管理職	短大卒	看護師 管理職	専門卒	兄2人	ii
14	女	23歳	札幌市	専業主婦・子育て中	中卒	結婚・出産→夫の美髪に暮らし子育てとパート(ファミレス)	下位	札幌市内	妊娠・結婚	厳しい(生活保護、結婚後も、夫の収入が不況で激減し、家計は厳しい)	不在(詳細不明)	不明	無職 病気がち	中卒	—	i
15	男	25歳	札幌市	求職中	中卒	アルバイト(居酒屋)→レング工(正規)→ホスト(約4年)→兼職→コールセンター(派遣)→求職中	下位	札幌市内	単位不足、親子の対立から学校教育への離反	実家は安定的だが、中退後は離家を迫られ厳しい経済状況	会社員 広島市理店(最近失業)	専門卒	小学生の時に離婚、再婚相手は父卒・初婚で父より12歳若い	不明	弟(中卒)	ii
16	男	28歳	札幌市	高校科目等履修生アルバイト(新聞配達員)	高卒	通信制高校卒→アルバイト→単身赴任→大学進学のための浪人(約10年、高校科目等履修生、新聞配達員)	下位	北海道外	不本意な学統制的な学校	安定的	会社員	不明	専業主婦	不明	兄、姉	i

高校中退の軌跡と構造（中間報告）

番号	男女	年齢	居住地	現在の状況	学歴	中退後の主な経路	中退校の学力的位置	高校所在地	主な中退理由	家計状況	父・職業	父・学歴	母・職業	母・学歴	兄弟	調査経路
17	女	17歳	札幌市	アルバイト(カラオケ店) (仕事中の怪我で休職中)	中卒	アルバイトを転々(スーパー→居酒屋→カラオケ店→ラーメン屋→コンビニ→スーパー→カレー屋→カラオケ店)、休職中、児童会館を時々利用	下位	札幌市内	教師との対立 管理的指導へ反発	やや厳しい (遺族年金とパート)	小学生で死別(病氣) (高卒・工場勤務)	パート →最近、介護職へ	高校中退	姉(中退経験あり)、弟	i	
18	女	17歳	札幌市	アルバイト(リサイクル店)	中卒	アルバイト(コンビニ・リサイクルショップ) 児童会館を時々利用	下位	札幌市内	人間関係(友人のいじめ、教師の対応、学校の雰囲気、地元仲間)	やや厳しい (専門学校進学を断念)	不在(詳細不明)	パート ホテル	高卒	姉(中退経験あり)	i	
19	男	25歳	札幌市	不動産賃貸業(正規雇用)	中卒	アルバイト(美容師) →不労所得(賃貸業)(正務)	下位	札幌市内	単位不足 学歴・学校教育への無用意識	比較的安定(高校進学が兄の大学進学と同時にあったため、余裕のなさはあり)	会社員	専門学校卒	パート	兄(大卒)、妹	iii	
20	女	21歳	札幌市	シンガー	専門学校卒	通信制高校・アルバイト(小売業、コンビニ・オン、ホステス)→専門学校進学→シンガー	上位	北見市	学業不振 夜の遊び	安定的	幼少期で離婚	自営 ピアノ教室	大卒	—	iii	
21	女	21歳	札幌市	私立大学(3年生)	大学在学中	通信制高校中退→アルバイト(1年間) →通塾→高認取得→大学進学(経済系)	上位	北見市	校外の友人関係 学校の雰囲気	安定的	会社員 カード会社 単身赴任	大卒	パート	妹(中退経験あり)	iii	
22	女	18歳	旭川市	アルバイト(登録型派遣) 事務補助(自営・建設業)	中卒	アルバイト(登録型派遣) +事務補助(自営・建設業)	下位	旭川市	友人関係 (女子グループ)	安定的	自営業 建設業	高卒	専業主婦	妹(中3)	iii	
23	女	18歳	旭川市	無職(家事手伝い)	中卒	アルバイト(ホテル客室清掃) →無職・家事手伝い	下位	旭川市	友人関係 (女子グループ)	安定的	自営業 鉄工所	中卒	ホームヘルパー	姉2人	iii	
24	女	28歳	旭川市	介護職(パートタイム)	中卒	アルバイト(飲食店→青果工場)→17歳で出産→アルバイト(スーパー)、第2子、第3子出産→ホームヘルパー資格取得→介護職	下位	旭川近郊	経済的理由 長距離通学	厳しい (母親の過労)	不在(詳細不明)	保育士+夜間のコンビニ	短大卒	姉	iii	
25	女	29歳	旭川市	介護職(パートタイム) (働きながら求職中)	中卒	アルバイト(観光ホテル住込み→水商売・パン屋→スーパー)→パート(正社員)→介護の資格を取得しパートしながら求職中	下位	旭川市	学業不振、遊び・問題行動、単位不足	厳しい (生活保護)	小学生で離婚	—	仲居	—	iii	
26	女	30歳	旭川市	事務手伝い(建設業) スナックの手伝い	中卒	アルバイト(店・コンビニ・そば・うどん、夜・居酒屋)→観光ホテル住込(契約社員)→パート(パンコ店)→父親が勤める会社の手伝い(建設業)・スナック	下位	旭川市	両親の離婚に伴う、経済的困窮	厳しい(離婚により決定的に。高校は祖父父母の援助と奨学金)	高3で離婚 (高卒、会社員、自動車の設置作業)	喫茶店+夜間の清掃	高卒	弟(中卒)	iii	
27	女	21歳	札幌市	専門学校生(1年生)	専門在学中	公立定時制高校卒業 →専門学校進学(動物飼育系)	中位	札幌市内	友人関係(クラス集団への馴染めなさ)	やや厳しい (食費の心配あり。バイトしながら高校、専門学校は奨学金)	会社員 食品加工・卸売業	大卒	パート	妹(中3)	iii	
28	女	25歳	札幌市	ホステス	中卒	アルバイト(ホテルの客室清掃→コンビニ→居酒屋・ホステス→日銭)→ホステス	下位	札幌市内	学業不振、学習への無意味感、学校・教師への不信	比較的安定	会社員 米穀店	大卒	専業主婦 →パート	兄(自衛官)	ii	
29※	男	21歳	札幌市	私立大学生(3年生)	大学在学中	高認取得(高専在学中・3年生) →大学進学(薬学部)	上位	函館市	進路変更	安定的	地方公務員 管理職	大卒	専業主婦 (結婚前は保育士)	姉2人 長女は中退経験あり	ii	
30	男	20歳	北広島市	私立大学生(2年生)	大学在学中	通信制高校卒 →大学進学(法学部)	下位	札幌市内	教員とのトラブル、転学処分	比較的安定 (不明確だが、現在は、学費等の心配はあまりない)	幼少期に離婚 再婚の予定あり	—	無職	—	ii	
31	男	19歳	札幌市	アルバイト(酒屋の配達)	中卒	アルバイト(繁華街の居酒屋→短期・球場→郊外の居酒屋→短期・引越し等→酒屋配達)	下位	札幌市内	経済的困難 母の病氣	厳しい (自己破産経験あり)	不在(詳細不明)	—	無職(水商売→精神的疾患)	—	i	
32	男	26歳	札幌市	私立大学(1年生)	大学在学中	公立通信制高校編入→休学 →FS・不登校支援組織などを経て復学・卒業 →大学進学(福祉系)	下位	札幌市内	中学からの不登校	安定的	公務員 秘書・職員	大卒	パート →入院中	姉(大卒)	iii	
33	男	22歳	札幌市	公立通信制高校(3年生)	高校在学中	アルバイト(父親が勤める工場→スーパー→無職→清掃作業)→公立通信制高校	下位	空知地域	問題行動(友人関係、彼女)、教師への不信	やや厳しい (中退後に父親の失業)	工場勤務 失業→タクシードライバー	中卒、職業訓練校	専業主婦	妹(専門学校中退)	iii	

※ケース29は、高等専門学校のための本報告の分析対象からは除いている。

第3章 聞き取り調査によるケース分析

1 家庭の状況とその影響

伊藤健治・津田紗希子・小林なつみ・家坂朱・笠島沙喜

本節では、高校中退に至るまで過程や現在までの状況において、家庭がどのような影響を有していたのかを分析していく。主な分析の視点としては、家庭の経済的状況と家族関係の2点から、中退要因としての影響と中退後の進路形成への影響について検討する。さらに、非経済的な家庭背景を探るために、両親の学歴や職業、文化的資本などの観点による分析と、幼少期を含めた教育・子育てに関する家庭の意識面からの分析を試みることによって、多面的に家庭と高校中退との関わりを考察していく。

(1) 家庭の経済的状況

①中退要因としての経済的状況

高校中退の背景の一つとして、家庭の経済的状況があげられる。本調査においても、家庭の経済的な状況が、中退に至る過程で何らかの影響を与えたと考えられるケースが一定程度見られた。しかし、ほとんどのケースで中退に至る過程は様々な背景が複雑に絡み合っており、家庭の経済的な状況が直接の理由として語られたケースは多くはなかった。

初めに、中退に至る主たる要因が家庭の経済的理由であった4ケースに着目する(5、24、26、31)。これらに共通な点として、高校入学前から経済的な不安を抱えてはいたが、両親の離婚や主たる稼ぎ手の病気によって、家計の危機に直面したことが直接的なきっかけとなっていた。さらに、この4件すべてにおいて、中退の決断は本人自らが親に申し出る形で行われている。つまり、経済的な危機に直面した家庭の中で、高校生である本人が「家計を助けない」という思いから、高校を中退して働くという道を決断していた。また、中退後の進路については、多くがアルバイトや派遣、契約社員など不安定な仕事で転職を複数回経験している。たとえば、家計を支えるために幾つものアルバイトを転々としてきたケースでは、調理の仕事がしたいという明確な希望があり、居酒屋などで経験を積もうとしてきたが、労働条件と経済的な事情が相俟って、具体的な進路展望を描くまでに至っていない(31)。また、10代で妊娠・出産したケースも2件あったが、どちらも予期せぬ妊娠であった。一方は、中退直後に妊娠が発覚したため、結婚・出産と当初の予定とは異なる道に進むが、結婚後も経済的状況は厳しく、生活が維持できずに離婚に至り、その後は自立を目指して看護学校に通うため高校卒認定試験も取得したが、高い学費が壁になり実現の見通しは立っていない(5)。もう一方は、中退から1年後、アルバイトをしている時期に妊娠が発覚した。当時、相手の男性は定時制高校に通いながら働いており、籍は入れずお互いの実家に住んで親の助けを借りながら生活した。その後、パートをしながら3人の子どもを出産し、現在はホームヘルパーの資格を取ってパートで介護の仕事をしている(24)。両ケースとも、結婚によって経済的状況が好転したわけではなかった。

以上のように、経済的な要因で中退したケースでは、中退して働くという明確な意思を有していながらも、初職において家計の補助的な収入が得られる程度の緊急避難的な就労形態を選択するケースが多く、その後も安定的な職業に就くことには難しさが見られる。

次に、中退の直接的な要因に限らず、中退に至る時点までに家庭が経済的に何らかの困難を

抱えていたケースについて見ていく。本調査では、生活保護を受給していた世帯（5件）を含め、高校進学時点や中退直後の進路選択において経済的に困難な状況が語られたケースは13件あった（2、3、4、5、6、10、14、17、18、24、25、26、31）。さらに、中退後に親の病気や失業などによって経済的な問題が生じたケースも数件あったが、中退に至る背景と中退後の進路形成という観点から、本節では「経済的なゆとりのないケース」として、主にこの13件を対象として検討していく。

まず、経済的な事情が影響を与えた側面として、高校に進学する際の影響があげられる。学費の負担の大きい私立高校に通うことが難しいため、確実に合格できる公立高校という条件で遠方の学校を選択するケースや、アルバイトのために定時制高校に進学するケースが見られた。また、この13件における高校の選択理由として最も多く語られたのは「学力的な困難」であった。実際に13件のうち12件までが、学力的に低位に位置する高校に進学している。そのうち、主に学力的な理由によって私立高校に進学したケースも5件あり、経済的に余裕のない家庭において学費負担の大きな私立高校に進学せざるを得ない状況が見られた。また、公立であっても学力的に低位の高校は、多くの課題を抱えている教育困難校である場合も少なくないため、中退のリスクが高い学校であると考えられる。経済的な困難を抱えている家庭では、塾や家庭教師などの追加的な教育投資が困難であるだけでなく、ひとり親の家庭も多い（高校在学中に離婚したケースも含めると10件が母子家庭であった）、幼少期からの家庭での学習支援の難しさもあると思われる。ひとり親家庭では、生活を維持するために昼と夜に仕事を掛け持ちするケースもあり、子どもと一緒に過ごすことができる時間を確保することも難しい状況がうかがわれた。

以上からも、家庭の経済的な状況は、高校中退に至る直接的な要因として語られない場合であっても、様々な要因と複合的に関わり合い、中退の背景の1つとして大きな位置を占めるものであると考えられる。

②中退後の進路への影響

経済的なゆとりのない13件について中退後の進路を見ると、在学中の1件を含めると6件で高校卒業資格を取得するために学習を継続している。全32件のうち高校卒業資格の取得が15件であることと比べても大きな差は認められない。しかし、大学や専門学校など中等後教育へ進学している件数で比較すると、全体では高校卒業資格取得者15件のうち9件が中等後教育へ進学しているが、経済的にゆとりのない層では中等後教育への進学は1件もない。

以下では、家庭の経済的状況が中退後の進路にどのような影響を与えているのかを具体的に見ていく。初めに、経済的にゆとりのない層で、中退後に高校卒業資格を取得した6件の内訳を確認すると、公立定時制高校2件（3、10）、私立通信制高校＋技能連携校（フリースクール）2件（2、4）、フリースクール高等部＋高卒認定試験1件（6）、予備校＋高卒認定試験1件（5）であった。定時制の2件は、ともに中退した高校も定時制であり、主な中退理由は学校外でのトラブルによる心身の不調と高校内外での素行の乱れであったが、ともに母親からの勧めで高校に通い直していた。フリースクール関連の高校に通っていた3件では、クラス内での友人関係が主な要因で中退しており、インターネットで自ら見つけた2件と友人からの紹介1件であった。フリースクール＋高卒認定試験のケースは、自らインターネットで技能連携校のフリースクールを見つけるが、経済的な理由から通信制高校の学費と技能連携校の費用を負担することが困難だったため、フリースクールの職員のアドバイスにより、通信制高校には所属せず、

高卒認定試験を受けることにした。他のケースでも、サポート校では公立高校に比べて多くの費用がかかるため、あるケースでは親族からの協力があって編入が可能になり、別なケースでは大学進学のための蓄えを当てたため高卒後の進学を断念していた。

また、中退後にアルバイト等の就労へ進んだケースでは、2件で次の進路として専門学校への進学を望みながら経済的な理由により断念していた（17、18）。なお、高校に通い直したいと考えながら経済的な理由により断念したケースは見られなかった。しかし、高校等へ通い直しを選択しなかった7件のうち、結婚・出産した3件を除くと、経済的に自立し離家している者はおらず、やはり不安定な就労状況にあるものが多い。

一方で、家計が一貫して安定していると考えられる8件（9、13、16、20、21、22、23、32）を見ると、6件（9、13、16、20、21、32）までが高校卒業資格を取得し、うち4件（9、13、21、32）が大学、1件（20）が専門学校へ進学している。残りの2件はフリーターだが、18歳と若いこともあり現在も進路を模索している段階にあると思われる（22、23）。

では、経済的にゆとりのない層では、どのような進路をたどっているのだろうか。経済的にゆとりのない層で正規雇用就いたケースは3件あった。そのうち2件は高校等に通い直し、教員のアドバイスを受けながら卒業と同時に介護の仕事に就いていた（2、10）。もう1件では、5年以上パートや水商売など不安定な職を経験した後、求人情報誌でパチンコ店の正社員として採用された。当人は、中退だと正社員の就職は難しく、たとえ運良く正社員に就けても中退と高卒で待遇が大きく違うと語っている。彼女は現在、パチンコ店を辞め、昔からの夢であった医療関係の仕事をするために、パートで介護の仕事をしながら医療事務の資格取得を目指している（25）。また、正規雇用就いておらず、結婚していないケースのほぼ全てで、安定した仕事に就くために資格を取得したいと考えているが経済的な理由で難しいと話していた。目指す資格は看護、介護、保育関係、調理師、美容関係、運転免許など様々だが、不安定就労の経験から資格が必要だと考えていても、経済的な後ろ盾がないために不安定就労に留まらざるを得ないという負の循環が生じている（5、6、17、18、25、26、31）。

（2）家族関係

①中退の背景としての家族関係

多くの人々にとって家庭は生活の基盤であり、中退に至るプロセスにおいても家庭内で形成されてきた家族関係から受ける影響は大きい。本調査においても、中退の背景に家族関係が関わっていたと考えられるケースが一定程度みられた。

はじめに、家族関係が要因の一つとなって中退に至ったケースに着目する。まず、より直接的に関わっていた2件について検討していく（15、28）。一方のケースでは、父親による過度な教育期待と強制的な指導方針に対して強く反発していった。そのため中学から学習を放棄するようになり、進学した商業高校でも商業の授業に関心が持てずに欠席日数が増加し、父親から「やる気がないならやめろ」と言われたことで中退を決意した。今なお父親との対立関係は続いており、疎遠な状態で家庭からの支援は得られていない（15）。もう一方は、幼少期から兄との教育機会の差にジェンダー的な不平等を感じており、それにも関わらず厳しく勉強するように言い続ける両親に対する反発から次第に学習への諦めを生じさせていた。高校入学後も家族との喧嘩が絶えず、単位不足による留年が決まったときは、「（留年は）恥ずかしいから、（高校を）辞めてくれ」と言われた。中退後は徐々に家族関係も良くなってきたが、積極的な支援はなく、本人の就労状況も不安定である（28）。

これらのケースでは、家族関係の対立を起点に、学習意欲の低下、学校からの遊離へと繋がっており、中退の決断時点でも本人への配慮は見られなかった。

続いて、家族関係が何らかの形で中退に至る過程に関わっていたと考えられるケースをみていく。本調査では、ひとり親世帯や夫婦間不和、長期的な疾病など、不安定な家庭環境を抱えたケースが、全体の約半数（16件）でみられた。そのうち9件で、中退に至る過程での「夜遊び」などの高リスクな友人関係とそれに伴う問題行動がみられた（3、5、10、15、17、18、25、30、33）。ある例では、親の離婚・再婚により幼少期から親戚と母親の家を行き来しており、学校や近所でも家庭に関する噂話で嫌な思いをしてきたが、それを家族に相談することもできなかった。徐々に生活が乱れていったが、母親と離れて暮らしていたため関わりは希薄で、家庭からの働きかけはないまま、度重なる問題行動が原因で退学へと追い込まれた（30）。また、家庭環境が不安定な16件のうち、15件で小・中学校の頃から「勉強は嫌いだ」と話しており、実際に14件が学力的に低位に位置する高校へ進学するなど、高校入学以前からの学習意欲の低下がみられた（3、5、6、10、14、15、17、18、24、25、26、30、31、33）。ほとんどのケースで、学習に対する家庭からの働きかけが少なく、家庭の不安定さ故に子どもにかかる時間的・精神的余裕も少ないことから、家庭での学習支援をしにくい環境が窺われた。さらに、中退に至る過程で不登校を経験していたケースは16件中6件あったが、いずれも不登校に関して家族と言い争うことはあっても、本人に寄り添った支援はみられなかった（3、8、11、17、18、33）。このように、不安定な家庭背景によるゆとりのない家族関係は、本人のわずかな心境の変化に対する気付きを難しくさせ、実際の支援を困難にしていたと思われる。

次に、高校中退という大きな決断において、家族関係が本人の支えになるケースを検討していく。まず、中退に関する家族への相談状況をみると、相談をしなかった8件のケースは、いずれも中退時の家族関係が対立や希薄化しているなど良好な状態ではなかった（5、7、12、14、15、21、28、30）。一方、家族へ相談をしていたケースのほとんどで、中退時において安定した家族関係がみられた。そのうち、本人の状況を配慮して中退を肯定的に捉え、その後も積極的に支援していたケースが7件あった（1、2、3、4、9、13、20）。そのうち3件では、教員の対応や学校体制への不満（2、20）、高リスクな友人関係への傾倒を懸念する（4）など、現状の高校生活に対する意識を家族間で共有し、より良い環境でのやり直しを応援していた。また、他方の4件では、本人の健康面（1、3）や中学校からの不登校経験（9、13）を配慮した結果、高校生活を強要しないという点で、中退を支持する様子が窺えた。以上の7件はいずれも中退後に家庭からの積極的な支援を受け、他の高校などでの学び直しを果たしている。現状を改善するために中退を前向きに捉え、本人が次の進路に向かうための支えとして、家庭が機能していた。

以上のように、家庭内の家族関係は、中退への直接的な影響に限らず、複雑な家族関係が本人の精神状態に何らかの不安定さをもたらし、学校生活や学習そのものに向き合いにくくさせることによって、間接的にも中退に影響を与えていた。またその一方では、高校中退という大きな決断にあたっての支えにもなっており、中退の前後を含んだ本人の意識には、様々な面において家族関係が大きく作用している。

②中退後の家族支援

本調査では、中退後に、何らかの形で家庭からの支援を受けていたケースと、一方でほとんど支援を受けられなかったケースがみられた。

家庭からの支援で最も多くみられたのは、精神面での支えであった。中退直後は、多くの者が先行きの見えぬ不安から、少なからず焦りや後悔を感じるなど、不安定な精神状況に置かれている。そうした中で、一番の支えになっていたのは多くのケースで家族であり、また、実際に次の進路へと踏み出す際にも、家庭からの精神的な支えが励みになっていた。このようなケースは、実に 26 件でみられた。以下では、このような精神的な支えの重要性を踏まえた上で、より具体的な支援の状況について検討していく。

まず、全体のうち 21 件で家庭による何らかの具体的な支援がみられたが、大きく二つに分けると、学び直しや就労に関しての具体的なアドバイスがあったケースが 12 件で、具体的なアドバイスこそないが、本人の意志を尊重し、その後の進路を経済的に支えていたケースが 9 件であった。

前者では、フリースクール等の紹介（1、32）、転入や新しい高校での学び直しの提案（3、9、10、20、21、22、23、27、28）、高卒資格取得に関する情報提供（11）などの、より具体的なアドバイスがみられた。ほとんどのケースにおいて、学歴というよりも本人の現状や将来を心配した結果として、具体的なアドバイスに繋がっていた。中学校時に不登校を経験していたケースでは、高校入学前からフリースクール関係を視野に入れた家庭支援があり、高校中退を決意した時もスムーズな移行をはかっていた（9）。このように、具体的なアドバイスが実際の進路に直接繋がっていたケースが多くある一方で、家族にこれ以上迷惑をかけたくないという理由から具体的な提案を受け入れなかったケースもみられた（22、23）。また、中退時において家族関係が良くなかったケースでは、家庭と本人の意識が噛み合わず、具体的な提案があったにも関わらず、精神的な支えにもならなかったケースもあった（28）。

次に、後者の経済的な支援があった 9 件（2、4、6、8、13、16、19、30、33）のケースでは、中退後、本人の意志が決まるまでの不安定な状態を、家族が支えていた様子が多くみられた。あるケースでは、不安な気持ちを和らげようと、両親が積極的に外へ連れ出すなど働きかけたことによって、本人の意識も前向きになり、自らの力で調べて通信制高校に行くことを決意していた（13）。別のケースでは、本人が就労の道に進むことにしたため学費等の経済的支援はなかったが、家庭での安定した生活基盤を背景にして、数年間の不安定な就労を経て正規雇用の職に就くまで、一貫して本人の意志を尊重しながら生活を支えていた（19）。このように、多くのケースでは、次の進路へ向かうまでの不安定な状態を精神的に支えつつ、本人の意志が明確になってからは、それを尊重して、経済的な支援をおこなっている様子がうかがえた。しかし、両親の離婚・再婚による複雑な家庭環境のため家族関係が希薄化していたケースでは、学費の支払いなどで経済的な支援はあっても、精神的な支えとしては、ほとんど語られていなかった（8、30）。

一方で、家庭が一定の精神的な支えとして機能していながら、具体的な支援は受けられなかったケースもあった（17、24、25、26、31）。これらの背景には、家庭の経済的困難があり、特に経済的な理由で中退を決断したケースでは、家庭からの支援どころか、自らが転職を繰り返しながら、家庭を支えている状況にある（26、31）。また、別のケースでは、経済的なゆとりのなさから、専門学校への進学を諦めてアルバイト生活を送るなど、潜在的に自らの進路を抑制していた様子が窺えた（17、25）。しかしながら、このような困難な立場においても精神的な支えとなっていたのは家族であり、また、これらのケースはいずれも母子家庭であったが、母親と子どもとの関係性は一層強い繋がりをみせていた。

最後に、家庭からの直接的な支援もなく、精神的な拠り所にすらなっていなかった 6 件のケースでは、支援を受けられなかった背景に様々な要因があった。一つに、家族との対立関係があげられる（15、18）。これらのケースでは、家族と本人との間で意見に齟齬が生じていた。あるケースでは、専門学校進学を約束して母親から中退の承諾を得たが、学費が高額なことを知り、すぐに進学を諦めると、そのことで母親から責められ、今も家庭の居心地が悪く、積極的な支援も受けられていない（18）。また、日常的に家族関係が希薄化していたケース（7、12）や、妊娠・結婚により、実家から離れたケース（5、14）では、家族とのかかわりがほとんどないため支援を得にくい状況にあった。以上 6 件のケースはすべて、家庭からの直接的な支援だけでなく、精神的な支えを得られなかった点で共通している。対立、希薄化した家族関係では、目に見えた支援はおろか内面的な支えを得ることも困難であり、それが本人の意識にも影響を与え、フリーターなど不安定な状態から抜け出すことを困難にしている。

以上のように、中退後の支援については、多くのケースで依然として家庭に頼っていることがわかる。また、その支援の有無は、家庭の経済状況や教育への価値意識などと複合的にかかわりあいながらも、特に精神的な支えに関しては、家族関係が一定の影響を持っていたといえる。

（３）両親の学歴・職業・文化資本

次に、家庭の階層や文化的な背景と中退後の進路との関係をみていく。高校中退に至る過程や中退後の進路形成において、生まれ育った家庭環境の影響は、非経済的な要因としても大きく作用していると考えられる。そのため、本項では親の学歴等に象徴される家庭の文化的な要素に着目して検討を行う。なお、本調査では本人へのヒアリングから聞き取れた家庭背景の情報は限定的であるが、その限界を前提とした上でなお以下の点について、家庭環境が何らかの影響をもたらしていると考えられる。

まず、学歴に関して、両親のどちらかが高等教育（大学、短大）を卒業している 9 件では、本人の高卒資格取得は 7 件（4、10、13、20、21、27、32）あり、うち 4 件が大学に進み（10、13、21、32）、2 件が専門学校に進学（20、27）していた。一方で、両親のどちらかが高卒未満（中卒、高校中退）の 9 件のうち、本人の高卒資格取得が 2 件（5、6）、在学中が 1 件（33）であり、中等後教育への進学者は 1 人もいなかった。両親の学歴と本人学歴の相関は、両親の教育への価値意識とも関連して、本人への積極的な働きかけや本人の進路意識の形成の上で影響を与えていると考えられる。

次に、父親の職業で見ると、安定した雇用形態である場合¹⁴、11 件のうち 8 件で高校卒業資格を取得しており（うち 5 件が大学に進み（9、13、21、32）、1 件が専門学校に進学（27）している。）、残りの 3 件のうち、1 件は安定した家庭の生活基盤を背景に正規就労に辿りついたケース（19）、2 件は親子関係でのトラブルが認められたケースであった（15、28）。父親の職業における安定性は、家庭の経済的な状況に直接的に関わっていると考えられるが、中等後教育進学者を除いては経済的にゆとりのない層も含まれており、両親・本人の意識や家庭の文化的な背景としての影響もうかがわれる。

さらに、兄弟姉妹の状況を見ると、15 歳以上の兄弟姉妹がいる 22 件のうち、9 ケースで高校を卒業していない兄弟姉妹がいる（中退 5 件（4、12、17、18、21）、中卒 3 件（9、15、26）、

¹⁴インタビューから把握することができた範囲での父親の職業に関して、SSM調査における職業の大分類を参考に、専門、管理、事務、販売に該当し、失業を経験していないと思われるケースを安定していると判断した（2、4、9、13、15、16、19、21、27、28、32）。

休学中1件(5))。家庭で身近に中退経験者がいることは高卒以外の進路モデルとなり中退に至る可能性を高めるとも考えられるが、一方で中退後の進路の難しさを認識する機会にもなる。それにもかかわらず家庭で複数の中退経験者がいることは、家庭の背景によって中退に至るリスクが高い事を示すものであると考えられる。

また、家庭の社会的・文化的な背景が本人の進路形成に影響を与えたケースもみられた。あるケースでは、母親がピアノ教室をしており幼い頃から音楽に触れる機会が多く、高校では吹奏楽部に所属しサックス奏者を夢見ていた。しかし、中退したことでその夢は途絶えたが、中退後の生活の中でやはり音楽関係の目標を持ち、専門学校でトレーニングを受けて、現在では歌手として着実に夢を実現しようとしている(20)。別のケースでは、中退後に母親の提案で定時制高校への編入準備をしている期間に、母親からの「こういう仕事が向いてるんじゃない」という勧めでホームヘルパーの資格を取得していた。高校卒業後の現在は、介護老人ホームで正社員として働いている。母親から提供される助言や経済的な支援が重要な資源となって次のステップへの移行を果たしているが、その背景には、福祉系の大学を中退している母親の経歴も影響していると考えられる(10)。また別のケースでは、「高校を中退したのだから、もう母親のような保育士にはなれない」と夢をあきらめたが、様々なアルバイトや結婚・出産を経て、人のお世話をする仕事がしたいという気持ちが芽生えて介護の資格を取り、育児をしながら働いている。これは保育士であった母親の影響が大きいと思われるケースであった(24)。その他にも、父親の影響で自動車関係の仕事を目指すようになったケース(33)や、不登校経験を医療従事者でもある両親の支援で乗り越えた後、自分の経験を生かすために大学で心理学を学んでいるケース(13)などがあつた。以上のように家庭の社会的・文化的な背景が、両親の直接的な働きかけを伴わない場合であっても、本人の進路形成に少なからず影響を与えていた。

(4)教育への価値意識と教育方針

本項では、家庭での教育に対する意識に焦点を当てる。なぜなら、生まれ育った家庭において、どのような意識の中で子育て・教育が行われてきたかが、家族関係や家庭からの支援、または本人の行動や意識を形成する上で、少なからず影響を与えと考えられるからである。しかし、本調査では幼少期からの親の教育方針や教育期待に関する言及は多くなされていない。そのため詳細な分析は難しく、本人の語りからうかがわれた印象を中心にした曖昧な分析にとどまるが、中退経験者の家庭における両親の教育に関する意識が中退後の支援にどのような影響を与えているかを中心に検討していきたい。

まず、家庭の子育て・教育の方針としては、〈学歴・学校教育を重視するタイプ〉よりも〈本人の自主性を尊重するタイプ〉がかなり多く見られた。ただし、この2つのタイプは、どちらにより比重が置かれているかの区別であり、はっきりとした傾向に分かれているわけではなかった。また、意識の違いには両親自身の教育や社会的な経験による影響もあるが、どちらのタイプが家庭教育として優れているかという問題ではなく、それぞれの親たちは状況に応じて柔軟にバランスを取りながら子どもと関わっていると考えられる。そのため、高校中退と家庭背景との関係を考察する上ではより詳細にみていく必要がある。

たとえば2つのタイプの中には、次のような差異が含まれている。〈学歴・学校教育を重視するタイプ〉では、親の過度な教育期待によって本人が精神的ストレスを感じていたケースもあれば、親の意識を反映して中退後の学び直しに繋がったケースもある。また、〈自主性を尊重するタイプ〉をより詳しく見てみると、両親が学歴や学校教育への高い価値意識を有しながら

も本人の意思を尊重しているタイプ、「自分らしさ」や礼儀や挨拶、コミュニケーションなど人間性を重視するタイプ、学力や学歴は重視していないが高校くらい卒業しておかないと社会に出て苦労すると考えているタイプ、人に迷惑をかけたり、悪いことをしなければ本人の好きにしたら良いと考えていたり、積極的な関わりがあまり見られなかった放任的なタイプなど、かなり異なった意識が存在している。そして、このような両親の意識の違いは、中退の決断や中退後の支援に少なからず影響を与えていると考えられる。たとえば、中退時における両親への相談の有無でみると、相談なしのケースでは放任的な家庭や教育期待が非常に高い家庭が多く見られた。これらの多くは、中退にあたって相談できる関係性が築けておらず、その後の家庭支援も受けにくい状況にあった。

次に、より具体的に両親の高校卒業に対する意識に着目すると、大多数のケースで「高卒資格を取得していた方がいい」という意識を有していた。高校進学率が90%を超える現代の親の意識としては当然とも思われるが、中退経験を持つ者の親にとっても、高校卒業資格の取得は、共通した教育への価値意識であることが分かる。しかし、このような意識を持ち合わせているにも関わらず中退に至っていることから、両親の高校卒業に対する意識は、必ずしも中退の直接的な歯止めになっているわけではない。ところが、中退後の状況に関しては、両親の高校教育への意識による影響が大きくみられた。

中退以前とは異なり、中退後における親の高卒に対する意識では、①引き続き強い意識を持っており具体的な進路提案等を行っているタイプ、②高卒への意識を保ちながらも具体的な働きかけはないタイプ、③中退後は高卒への意識があまり高くないタイプ、と大きく3つに分けることができる。親の高卒への意識が強い①のタイプでは、多くのケースで中退後に高校等で学び直すなどして高卒資格を取得していた。なかには、「親の気持ちに伝えるため」という理由で高校等に通り直しているケースも見られる（3、4、9など）。その一方で、「親に迷惑をかけたくない」という理由で、親からの具体的な提案にも関わらずアルバイトの道を選択したケースもあった（22、23）。

次に、中退後も高卒への意識を比較的高く持ちながらも具体的な提案がなかった②のタイプでは、さらに2つに分けることができる。一方は中退者本人の意識が学び直しへ向かっていたケース（6、13、16など）で、他方は高校卒業を望みながらもアルバイト等の就労の道へと進んでいるケースである（18、24、25、26、31）。後者では、家計にゆとりのないケースが多くを占めており、具体的な進路提案まで結びつかない背景に家庭の経済的な状況が強く作用しているものと考えられる。さらに、これらには中退時に比較的強い引き留めがあったケースが多く、一旦辞めてしまうと通り直すことが難しいという認識があったと考えられる。

最後に、中退後における親の高卒への価値意識が低い③のタイプでは、中退後に高卒資格を取得しているケースは見られず、本人の意識も高校で学び直すことには消極的なケースが多かった。以上からも、家庭の経済状況などによって積極的な支援や働きかけに制約が生じているものの、家族が高卒への価値意識を一定程度持っていることは、中退者本人の気持ちが高卒資格取得へと動き出す意識付けになっていると思われる。

一方で、中退後の進路として高卒資格を取得せずに就労しているケースでは、両親が就労に対する何らかの意識を持って、積極的に本人へ働きかけているケースはほとんど見られなかった。少ない例では、アルバイトが決まらないために自営業の事務を手伝わせているケース（22）、大型免許などの資格取得を勧めたケース（33）、いつか一緒にお店を出したいと夢を語ってい

たケース（26）などがあるが、具体的な就労に関するアドバイスは見られなかった。また、高卒資格取得後に就労しているケースでも、母親の勧めで介護の資格を取得した例はあるが、多くのケースで就労への明確なアドバイス等は見られなかった。

中退経験者の就労状況は不安定な場合が多く、働いていても経済的・精神的にも家族に大きく依存している。それにも関わらず、学校に通い直す場合とは対照的に、就労に関する具体的なアドバイスを家庭の中から受け取ることは難しい。そのため、精神的な支えや生活基盤が家庭にあっても、そこから経済的・社会的に自立していくことが困難になっている。

（５）小括

本節のまとめとして、高校中退と家庭の関わりについて要点を整理していく。

まず、家庭の経済的状況による影響については、中退の直接的要因として語られるケースは限定的であったが、厳しい家計状況が背景になって間接的に中退に繋がっていく様子が見られた。さらに、中退後の進路形成に関しては家庭の経済状況との相関がより一層明確にみられた。特に、大学や専門学校の進学に関して差が大きく、就労者では不安定就労を抜け出すために資格や技術の取得を望みながらも経済的な問題が壁になっていた。その一方で、本調査では高卒資格取得に関する経済的要因による差異はみられなかった。

次に、家族関係については、対立的な親子関係を起点として中退に至るケースがあった他、不安定な家庭環境が学力低下や高リスクな友人関係への傾倒に繋がって中退の背景になっているケースが多くみられた。一方で、家族関係は中退時やその後の進路形成場面において本人の精神的な支えや直接的な支援に繋がっているケースも多く見られた。良好な家族関係を背景とした家庭からの様々な支援の有無が中退後の状況に大きな影響を与えており、中退者への支援が依然として家庭に大きく依存している様子が見られた。

さらに、非経済的な影響として家庭の社会的・文化的な背景や、教育・子育てへの価値意識や教育方針に関しても、たとえ両親による直接的な働きかけを伴わない場合であっても様々な影響を与えており、家庭に関しても様々な要因が複合的に絡み合っている様子が明らかになった。

以上のように、高校中退と家庭の関係を多面的に分析してきたが、中退に至る過程や中退後の進路形成において、家庭がとても大きな影響を有していることがわかる。このことは、家庭以外の支援が不足していることの現れでもあり、家族依存の状況を抜け出すためにも、社会的な支援のあり方を検討することが必要であろう。

２ 学校経験と高校中退

市原 純・清原 健・池野 純

本節では、高校中退経験者の学校経験に焦点を当て、検討を加える。検討では、主に小中学校の頃から高校中退に至るまでの期間、すなわち高校中退以前の学校経験に、その対象を絞った。高校中退以前の学校経験は、中退後の生活や経路に影響を与えていると考えられるが、本報告ではそこまで検討の視野を広げることができなかった。また、以下では高校中退経験者の学校経験を以下の三つ、(1) 学力、学校での勉強、(2) 学校管理体制、対教師関係、(3) 生徒間関係、友人関係、に分けて検討を加えているが、特に (2) と (3) に関しては、踏み込んだ

分析をするまでには至らず、一定の類型化と代表的なエピソードを列挙するに留まった。さらに、学校経験のこれら三つの要素の絡まり合いと、高校中退の背景との相関についても、分析の眼を向けることが十分にできていない。次回報告の課題としたい。

（１）学力、学校での勉強

①高校の学力的な位置

まず、全てのケースの中退先の高校における学力的な位置を確認してみる。割合としては、偏差値序列の下位に位置づく高校が多い。中退先の高校を上位、中位、下位に分類する¹⁵と、全 32 ケースのうち、下位が 27 件と多くを占め、中位が 3 件（8、13、27）、上位は 2 件（20、21）だった。

②高校の入学動機や経緯

次に、それぞれのケースについて、中退先の高校に入学した動機や経緯について確認してみると、どのケースにおいても、本人の学力が入学動機に大きな影響を与えていた。

（a）上位校・中位校の場合

はじめに上位校・中位校に進学したケースを確認してみると、本人が高校選択にあたって、何らかの積極性を有していたと思われるケースが、多く見られた。以下、上位校・中位校に進学したケースの、高校入学にあたっての動機や経緯について列挙してみる。

- ・中学校の頃に不登校の時期を経験するも、出席日数の不足が内申点に大きく影響せず、テストの成績が良かったために高校の選択肢があまり限定されずに、いくつかの理由に基づいて（「早くから大学進学を目指しており、地元の進学校で生徒の素行が良い高校だ」という評判を聞いた」（8）、「学力的にはもっと上位の高校にも行けたが、勉強もある程度やり、中学校では楽しめなかった部活などの学校生活も楽しみたいと考えて、『自由なイメージ』のある高校を選んだ」（13））、中位校への進学を選択したケース（8、13）。
- ・学力的には厳しかったが、その上位校にある吹奏楽部への入部を目指し、また「ただ〇〇（＝上位校）に行きたかった」として、受験勉強に励んでその上位校への入学を果たしたケース（20）。
- ・親が教育熱心で幼い頃から大学進学を勧められ、「勉強するのが当たり前だと思っていた」として中学校時代は成績も良く、大学進学を考えて地域で一番の進学校である上位校へと進学したケース（21）。
- ・塾の先生に勧められ、将来の就職などを考えて、資格なども多く取れる中位校の専門高校への推薦入学を決めたケース（27）。

高校選択にあたって、学力が大きな判断要素となるのは、高校中退者に限らず広く一般に見られる現象であり、ここで見たケースもその点については同様であると言える。したがって、上位校・中位校での高校中退者における入学動機や経緯に関しては、際立った特徴を有するものではないと、ひとまずは言えるかもしれない。上位校・中位校のケースで中退者と中退しない者との間に差が生まれてくると思われるのは、おそらく高校入学後の経験に関してである。

¹⁵ 北海道内の高校に関しては、『道新受験情報 2011 高校入試 志望校決定の手引き』（2010 年 10 月、北海道新聞社）の P100-105 に掲載されている「入試難易度ランキング」の数値を参照した。平均偏差値（SS）の最も高い高校の数値から最も低い高校の数値までを三分割し、それぞれ上位（68・57）、中位（56・45）、下位（44・33）とした。定時制高校など無記載の高校は下位に含めた。なお、道外の高校は 1 件のみ（16）であり、このケースは一次試験の受験を不合格の後、二次募集で「（偏差値的に）下から選んでいった」私立高校に合格したケースであるため、下位として集計した。正確を期すなら、それぞれのケースの入学年度における偏差値を確認すべきであるが、作業の煩雑さからそれを避けた。

ここで、上位校・中位校のケースとして共通に言えるのは、とりわけ次に見る下位校のケースと比較すると、高校選択の際の選択肢が、下位校のケースほどには限定されていないという点である。

(b) 下位校の場合

一方、下位校のケースにおいては、高校選択の時点で、入学できる高校の選択肢が限定されていた例が目立った。

学力による影響が考えられるケースとして、インタビューで本人の口から、成績の関係で行くことのできる高校が限られていた状況を述べていたケースは、下位校の全 27 ケースのうち、17 件で見られた (3、4、6、10、12、15、16、17、18、19、23、24、25、28、30、31、33)。

これらのうち、学力によって高校選択の選択肢が限定されていた事実を、インタビューの中で本人が直裁に述べていたケースとしては、以下のようなものがあった。学力の関係で中学校の先生から「〇〇高校と〇〇高校しか行けない」と言われたケース (18、25、30)。勉強ができなかったので「行ける高校はここだけだった」、「そもそも行ける高校が少なかった」、「選択肢が限定されていた」と本人が述べているケース (17、31、33) などである。

また、本人が直裁にその事実を述べてはいないものの、学力によって入学できる高校の選択肢が限定されたと解釈し得るケースとしては、以下のようなものが挙げられる。成績が足りなかったため、公立高校は選択の候補にできず、下位の私立高校を選ばざるを得なかったケース (4、6、15)。第一志望の公立高校が受験で不合格となり、併願していた下位の私立高校へ入学せざるを得なかったケース (16、19)。成績が悪かったため、入学試験が面接のみであることを理由に定時制高校への入学を選択したケース (10)。最初の高校受験に失敗し、二次募集で選択の余地なく特定の下位校へ入学せざるを得なかったケース (3、12、18)。第一志望の高校への受験を学力の関係で断念し、下位校へと志望校を変更せざるを得なかったケース (12¹⁶、23、33) などである。

なお、学力以外の理由で (ないしは、学力上の理由に加えて)、高校選択時の選択肢が限定された例としては、以下のようなものが見られた。疾患や通学上の都合など、止むを得ない事情で入学できる高校の選択肢が限定されていたことを本人が述べているケース (1、25、33)。経済的な事情が影響して選べる高校の選択肢が限定されていたことを本人が述べているケース (5、24、33)。不登校による出席日数不足と内申点への影響から、選べる高校が限定されてしまったことを本人が述べているケース (7、9、17、25、32) などである。これらは、いずれも下位校のケースであった。

そして、下位校のケースのうち、「どのような高校かも、よく知らないままに入学した」と本人が述べているケースが 4 件あった (6、9、10、11)。そのほか、高校選択の際に判断した要素として、学力や通学方法に関するもの以外としては、以下のようなものが見られた。恋人や友人、知人が入学することを選択理由にしていたケース (3、6、15)。友人との遊びやすさを選択の判断基準に選んでいるケース (14) などである。また、そもそも本人は高校進学に乗り気ではなかったが、親や先生などの周囲の勧めにしたがって高校進学を決めたことを本人が述べているケースも 2 件あった (3、17)。

さらに、入学動機に関する本人の語りを確認していくと、以下のようなものが見られた。

¹⁶ ケース 12 は、その志望変更した下位校の受験にも不合格となっており、二次募集で「そこしか選べなかった」別の下位校に入学することになったケースである。

- ・「高校ぐらいは卒業しておこうと思って（進学を決めた）」（7）
- ・「とにかく入学できればいいと考えて（いた）」（10）
- ・「小中学校では勉強が苦手で好きではなく、最初に先生から勧められた高校は母の母校で『何となく嫌』で、親や先生とよく話し合った上で次に勧められた（下位校を選んだ）」（26）
- ・「勉強をほとんどしなかったの、成績は悪かった。進学しても『どうせついていけない』と考え、高校進学自体も悩んでいたがギリギリで高校に行くことに決めた」（28）
- ・「小学校も中学校もほとんど行っていないのに、高校に行けるとは思っていなかった。本心は高校にいきたいと思わなかった。ただ、中学校を卒業したらその流れにしたがって高校に進学する、という感じ（で高校入学を決めた）」（32）

これらはいずれも、本人自身が高校進学そのものにあまり乗り気ではなく、そのため高校入学後の生活（、とりわけ高校での勉強に関するもの）のイメージもあまりないままに、実際の高校生活をスタートさせたようなケースであると見ることができる。

その一方で、下位校のケースにおいて、入学動機に関する本人の語りの中に、入学後の勉強に対する目的意識が垣間見えたり、学ぶことの内容を鑑みて高校を選んだと見られるケースは、以下の2件があったのみに過ぎなかった。

- ・「当初は別の専門高校（＝中位校）を志望していたが、学校説明会で、学力向上に力を入れていてと聞いて（下位校へと志望を変更した）」（2）
- ・「資格がたくさん取れることも（高校選択の際の）動機のひとつだった」（22）

以上より、下位校のケースの多くが、選択の余地があまりなく、特定の高校へと入学するに至ったものと見ることができる。学力が高校選択に大きな影響を与え、選ぶ余地の少ない形で高校に入学することになると、高校に通学し続けようとする意欲が相対的に乏しくなるだろうことは、容易に想像される。なお、繰り返しになるが、高校を選択する際に学力が理由の中の大きな要素を占め、学力によって本人が実際に選択しようとする高校の選択肢が限定されることは、何も高校中退者に限ったことではなく、一般的な傾向であるとも思われる。したがってまず、高校中退者に限定されない事実として、下位校に進学するケースでは、高校選択の際、上位校・中位校のケースと比較して相対的に見たときに、選び得る選択肢が狭い状況の中に置かれてしまうことは、指摘し得るだろう。そして、高校中退者が下位校から多く輩出されている現実を考えると、下位校に進学する高校生に共通して見られる、不本意入学や学びからの逃走という課題が、高校中退者にも多く当てはまると見て良いように思われる。

③学校の勉強に向かう姿勢

ここからは、学校の勉強に対するやる気や苦手さ等に焦点を当て、分析を行う。インタビューにおける本人の語りの中から、学校の勉強に向かう姿勢の有無について整理した。本人が、「勉強は嫌いだった・していなかった」「授業はわからなかった・つまらなかった」等と述べ、勉強に向かう姿勢をほとんど有していなかったと解釈し得るケースを《勉強姿勢なし》、本人が「勉強は嫌いではなかった・していた」「授業はわかりやすかった・楽しかった」等と述べ、勉強に向かう姿勢を一定程度有していたと解釈できるケースを《勉強姿勢あり》、インタビューで勉強に関する語りがほとんど見られなかったケースや、語りからは一概に判別し難いケースを《不明》とした¹⁷。それぞれ、高校入学前と高校入学後に分け判定した。高校入学前について

¹⁷ 勉強に対して、やる気を持っていることと、苦手であることとは、当然異なる。やる気はあるが苦手ではないケース（やればできるが、やる気がなかった、というもの。高校入学前であればケース5、15がそれに当てはまるよ

の判定には、小中学校の頃の学校生活に関する語りや、高校の入学動機や経緯についての語りなどから判断した。高校入学後について判定には、入学後の高校生活に関する語りや、高校中退の動機や経緯についての語り、中退直後の気持ちや進路選択に関する語りなどから判断した。

(a) 高校入学前に《勉強姿勢あり》の場合

はじめに、高校入学前に《勉強姿勢あり》と解し得るケースは、9 件であった（2、7、8、13、16、20、21、27、32）。上位校・中位校の 5 ケース全てが当てはまり、残りの 4 件は下位校のケースであった。

全体の 9 ケースのうち、高校入学後を《不明》としたケースは 3 つ（7、8、32）であり、いずれも小中学校から不登校を経験し、高校入学後も高校への通学に困難を感じるようになったケースである。高校入学後での勉強に関する語りがほとんどなかったため、《不明》とした。

高校入学後も《勉強姿勢あり》のままだったケースは 3 件（2、13、16）であった。いずれも勉強に向かう姿勢の有無とは別のところで、高校中退の背景が生じたものであった。別の背景とは、以下のようなものである。

- ・仲の良かった友人たちに「でたらめな噂」を流されるなど裏切られる経験を持ち、いじめが中退の主な背景となったケース（2）。
- ・中学校時代に不登校の時期を経験しており、高校入学後に高校のクラス担任の教師がその事実を知って本人へ理不尽な登校刺激を行い、そのプレッシャーに耐えきれず中退するに至ったケース（13）。
- ・「厳しい校則で息がつまる」高校生活、教員たちの強い統制とそれに対する「不信感」によって自ら積極的に中退を選択し、通信制高校への編入を果たしたケース（16）。

高校入学後に《勉強姿勢なし》へと転じたと解し得るケースは、3 つ（20、21、27）であり、いずれも上位校・中位校のケースであった。上位校の 2 ケース（20、21）は、学校の雰囲気や「真面目そうな人」が多い同級生関係、厳しい生徒指導などが肌に合わず、次第に遊びの友人関係との生活に魅力を感じていき、勉強に向かう姿勢を失っていったケースであった。一方、中位校のケースであるケース 27 は、高校入学直後からクラスの同級生関係の「アツい」雰囲気に馴染めず、それに反感を覚えたりしてクラスに溶け込めずに、生徒間関係・友人関係における孤立によって、勉強も「やる気があれば何とかこなすことができたと思うが入学後は勉強のやる気が起きなかった」と語っているケースである。3 つのケースのいずれも、学校内外での仲間関係が、勉強に向かう姿勢へと影響していくプロセスが見られた。また、上位校の 2 ケースにおいては、高校選択時のミスマッチという要素も高校中退の背景に関連していると思われる。

うにも思われたが、いずれもデータ上からはっきりと解釈することは難しい）や、苦手ではあっても勉強のやる気を有しているケースもある（例えば、「中学校時代は成績がふるわず、試験では 1 学年 300 名中ワースト 3 に入っていた。勉強をしたい気持ちに反して、内容理解が追いつかない感じだった」と述べているケース 16 など）。今回は、勉強の苦しさよりもやる気について主に焦点を当てて分析することとし、勉強に向かう姿勢の有無として確認することとした。本人が勉強に向かう姿勢を有していれば、あとは本人の状況に合わせて、その学びを支える側が、適切な学びの機会と環境を提供できるかが勝負となる。そこで本報告ではまず、本人の勉強に向かう姿勢についての状況を明らかにすべきであると考えた。勉強の苦手さに焦点を当てるなら、本人の能力上の問題（障がいの問題を含む）が論点として浮かび上がってくると思われ、その論点も高校中退を考える上で決して軽視すべきものではないが、紙幅等の関係上、今回は踏み込まない。なお、苦手であったためにやる気がなくなった、あるいはやる気がなかったために苦手になった、というようなケースは多いと考えられ、それは本調査のケースにおいてもおそらく同様であると思われる。

（b）高校入学前に《勉強姿勢なし》の場合

次に、高校入学前から《勉強姿勢なし》と解し得るケースは、16 件あった（3、5、6、9、10、11、12、14、15、17、18、19、25、26、28、31）。これらは、いずれも下位校のケースであった。

これらのうち、高校入学後も《勉強姿勢なし》のままだったと解釈し得るケースは、13 件であった（5、6、10、11、12、14、15、17、18、19、25、26、28）。この中で、データ上、高校中退の背景と勉強に向かう姿勢のなさに関連していないと解釈できたケースは、1 件に過ぎなかった（5¹⁸）。それ以外の 12 件のケースでは、ひとつのケースの中でその要素が重複しているものも含めて、以下のような形で勉強に向かう姿勢と高校中退の背景との関連が見られた。

- ・勉強に向かう姿勢のなさが、授業の遅刻や欠席などによる出席日数不足や、定期試験での「赤点」などにつながり、単位不足から留年が決定したことが、高校中退を促す直接的なきっかけとなったケース（11、15、19、25、28）。
- ・勉強に向かう姿勢のなさが学校外でのアルバイトや遊びの仲間関係が中心の生活へと魅力を感じさせ、それが高校中退の背景となったケース（10、14¹⁹、17、18、19、25）。
- ・勉強に向かう姿勢のなさや学力的な問題（例えば 2 次募集による不本意入学）のために、高校入学前に高校生活へのイメージを持つことができず、入学後の高校生活でのトラブルや学習内容におけるミスマッチを招き、それが高校中退の背景となったケース（6、18、19）。
- ・学力によって高校選択の時点で通学時間の長い高校を選ばざるを得ず、その通学時間の長さが高校中退の背景となっていたケース（12、25）。
- ・学力の問題で私立高校を選ばざるを得ず、入学後に家庭が困難に見舞われて経済的な事情から中退せざるを得なかったケース（26）²⁰。

以上の通り、《勉強姿勢なし》が小中学校の頃から高校まで継続していた場合、この問題が様々な形で高校中退の背景と関連してくることが多いと思われる。

一方、高校入学後に《勉強姿勢あり》へと転じたのは、2 つのケースのみであった（3、31）²¹。その 2 ケースでは、それぞれ以下のような語りがあった。

- ・「（高校では）『勉強できなかった人』に配慮した授業で、分かりやすかった」（3）
- ・「授業も、中学のときとは違って、分かりやすかった。高校に入学してすぐの授業は、中学までの授業の復習で、分からないところから徐々に教えてくれたので、とてもうれしかった」（31）

¹⁸ このケース 5 では、父親の病気による経済的な事情が高校中退の直接的なきっかけとなった。その他にも、経済的な事情から通学時間の長い通学方法を取らざるを得なかったことが、高校中退の背景に関連していると思われることなどから、いわゆる家庭の困難や貧困が高校中退に至る背景の基底にあったと思われるケースである。家庭の困難や貧困が勉強に向かう姿勢を失わせた可能性もあるが、ケース 5 ではそのように判断できる本人の語りがデータ上では見当たらなかった。

¹⁹ このケース 14 は、高校在学中の妊娠、出産のための退学というケースである。この妊娠に至る交際相手の男性とは、小学校時代の友人の友だちとして出会っている。高校入学後も小中学校から続いていた地元の遊びの仲間関係が続いていたことが、妊娠出産による高校中退という経路をもたらしただけの例と言える。

²⁰ 高校入学前に《勉強姿勢なし》だったものが高校入学後に《勉強姿勢あり》へと転じた例であるケース 31 も、高校選択時点で学力の関係で私立高校の入学を選択せざるを得ず、高校入学後に家庭が困難に見舞われて、経済的な事情から私立高校の学費を払えずに退学したケースである。

²¹ なお、ケース 9 は高校入学後にいじめに遭い、入学後 2 ヶ月ほどで中退しており、勉強に関する語りが見られなかったため、《不明》とした。

これらは、高校が適切な学び直しの機会を提供したことで、小中学校で学びから排除されていた状況を、食い止めることができていた例として見ることができる。こういった例が全体に比して少ないことは、高校中退者に学び直しの機会を提供できているケースが、極めて少ない状況にあることを想起させる。なお、この 2 ケースについては、「交際関係上のトラブルに起因して発症した精神的疾患」(3)、「家計を支える母の疾患に伴う経済的な事情」(31)などの理由から、高校中退へと至っている。

なお、ここまでは勉強に向かう姿勢について焦点を絞って確認してきたが、以上で見てきた通り、勉強に向かう姿勢とは、決して本人の意欲の問題に過ぎないわけではない点に、留意が必要である。本人の当時の生活が、様々な理由から勉強どころではない状況に置かれていた場合、当然ながら勉強のやる気も起きないであろう。やる気や姿勢を指標として用いることで、主観的な要素を重視しているかのような誤解を招くかもしれないが、筆者の意図としては決してそうではない。本人の主観性と客観的な条件とが混ぜ合わされるなかで、勉強へのやる気や向かう姿勢の有無が、データ上から解釈し得るものとして立ち現れてきていると見るべきである。

④学校での勉強と高校中退

あらためて、高校中退の背景と、学力や学校での勉強の問題との相関について確認してみる。

まず上位校のケース(20、21)については、高校入学後に、学校の雰囲気への馴染めなさや生徒指導の厳しさに対する反感から、高校内外における遊びの仲間関係へと親和性を示していたことなどから、勉強に向かう姿勢を次第に失っていき、それが高校中退に至る背景となっていた。とりわけケース 20 については、追試における「赤点」での留年決定が、高校中退に至る直接的なきっかけとなっており、勉強に向かう姿勢のなさが高校中退の主な背景のひとつとなったケースであると思われる。

中位校のケース(8、13、27)についてはそれぞれ、生徒間関係・友人関係の孤立による学校生活での不適応(8、27)、対教師関係における理不尽な経験(13)が主な高校中退の背景となっており、学力や学校での勉強の問題と高校中退の背景との相関は弱いものと解することができる。これら 3 つのケースは、学校での勉強に向かう以前に、対教師関係(13)や仲間関係(8、27)などの別の面において、学校生活を継続し難いと感じられるような経験に遭遇してしまった例であり、したがってこれらは次の項で主に検討すべきケースであると思われる。

最後に、下位校のケースについては、どのように見ればよいであろうか。まず、高校選択時点での入学動機や経緯について、成績の関係で行くことのできる高校が限られていた状況を本人が述べていたケースは、17 件あった(3、4、6、10、12、15、16、17、18、19、23、24、25、28、30、31、33)。また、本人自身が高校に進学して勉強することに乗り気ではなかったり、入学後の高校生活(とりわけ、勉強に関すること)への興味関心が薄かったと解釈し得るケースは、10 件あった(3、6、7、9、10、11、17、26、28、32)。これらを合わせ、両者の重複を除くと、下位校の全 27 ケースのうち、22 ケースが当てはまることになる。これらは、高校選択の時点で、学校での勉強に対して苦手意識や関心の薄さがある層と考えられる。しかし、厳密に考えるなら、高校選択の時点で勉強に対して関心の薄さや苦手意識があることと高校中退に至った背景との因果関係については、必ずしも明確ではない。

一方、下位校のケースにおける、勉強に向かう姿勢に関する分析を振り返ってみる。勉強に向かう姿勢がないことが、高校中退の直接的なきっかけとなった状況を本人が述べているケー

スは 5 件（11、15、19、25、28）であり、件数としては必ずしも多くない。しかし、直接的なきっかけとして本人が述べていなくとも、勉強に向かう姿勢のなさが高校中退の背景のひとつとなったと解釈し得るケースは、10 件あった（6、10、12、14、17、18、19、25、26、31）。両者の重複を除くと、下位校のケースのうち 13 件は、勉強に向かう姿勢のなさに、高校中退の背景との相関を見ることができる。

以上のように、学力や学校における勉強を、高校中退の背景として本人が直裁に語るケースは必ずしも多くない。次の項で見る、学校管理体制、対教師関係や生徒間関係、友人関係が、高校中退の背景として本人の口からエピソードで明確に語られていることに比べると、その特徴は顕著に感じられる。しかし、とりわけ下位校のケースにおいて、学力や学校における勉強が高校中退の背景として相関していると解し得る例は、ケースによって濃淡はあるものの、ある程度の割合で見ることができる。高校中退の直接的なきっかけとしてではなく、もしくは本人の語りからそれが明確に現れなかったとしても、学力や学校における勉強は、高校中退の背景と緩やかに関連している可能性があると思われる。

（2）学校管理体制、対教師関係

①学校管理体制

（a）高校の荒れ

はじめに、入学した高校に荒れがあったと本人が語るケースを確認すると、12 件が該当した（1、3、4、5、12、15、16、17、18、28、30、33）。全てが下位校のケースであった。これらの高校の様子としては、例えば以下のような語りがあった。

- ・「学校では、強い者が弱い者を従えるようないじめに似た関係があった」（4）
- ・「授業中教室に爆竹を投げ込む生徒がいるなど、学校は荒れていた。机の上にジュース、携帯、お菓子が置いてあるのが普通で、音楽を聞く、寝る、化粧するのが当たり前になっていた」（5）
- ・「高校は『不良みたいなの』が多くて、遅刻や欠席、生活指導なども厳しくなかった。むしろ、髪を染めていたりすると、先輩に目を付けられる方が恐かった。学校内では、いじめやけんかもそれなりにあった」（15）
- ・「集団でいじめをする学校の雰囲気嫌いだった。授業は簡単でつまらず、授業中に音楽聞いたり、飲み物飲んだり、サボったり、みんなそんな感じだった。やめていく人も多く、それが普通になっていた。先生は厳しくするけど効果はなかったと思う」（17）
- ・「入学前から不良とギャルしかいない嫌なイメージを持っていたが、実際に入学してみると更にひどく、馬鹿ばかりで荒れていた。学校自体は楽しかったが、クラスの雰囲気は良くなかった。クラスにはいくつかの派閥があって、それぞれが対立していた。授業中に、ペットボトルに隠したお酒を飲む、窓ガラスが割れる、教室がぐちゃぐちゃになる、ということもあり、マジメな人をいじめるのが定番になっていた。服装などの生活指導では、1 年生に対して特に厳しかったが、教員間で指導にばらつきが大きかった」（28）

次に、学校の管理体制や生徒指導の方針が高校中退の背景に関連しているケースの中で、一定の類型化を行う。高校側から停学等の処分を受ける対象となるような逸脱行動に、本人も関わっていたと解釈できるケースを《逸脱》カテゴリーとし、本人はその逸脱行動に関与していないが、高校の荒れの余波を受けたネガティブな事象を体験し、それが高校中退の背景に絡んだと解釈できるケースを《被害》カテゴリーとして、その 2 つの類型でそれぞれのケースを区

別した。

(b)《逸脱》カテゴリー

まず《逸脱》に類型化できるケースは、6件であった(12、17、25、28、30、33)。これらのケースで行われた逸脱行動とは、喫煙や深夜徘徊、器物破損、生徒間の喧嘩や暴力事件、教師との言い争いなどであった。本人のこれらの行動が高校中退へとつながったものであるが、そういった自身の逸脱行動に対して、学校側から次のような対応を受けたと述べているケースもあった。「マニュアル通り」の「人間味のない対応」を受けた(28)。「辞めそうな生徒」は1年生のうちに中退させてしまうような空気があった(30)。これらは、厳しい生徒指導の対応によって、逸脱行動を起こす生徒を押し出すような方針を高校側が取っていたことが窺われるようなものであった。

(c)《被害》カテゴリー

一方、《被害》カテゴリーに分類できたケースは、4件であった(1、2、9、18)。どのケースもいじめが関連していた。まず、高校の荒れによってクラスの中でいじめがあり、噂話や陰口、からかいや嫌がらせを受けるなど、本人が直接いじめの被害にあい、それが高校中退の背景となったケースが3つあった(1、2、9)。一方、ケース18は、本人が直接いじめの被害を受けたわけではないが、親しい友人のひとりが「不良」からいじめを受け、そのことを担任の教師に相談したところ、「彼(＝「不良」、友人をいじめている人)があと一度問題を起こして停学処分になれば退学だから、それまで待て」と言われて具体的には何もしてくれず、それで担任の教師や学校全体に対しても不信感を抱いたという例であった。本人はその後、いじめを受けていた友人が耐え切れずに中退したことで、「自分もがんばれないな」と思うようになり、その友人の中退の1か月後に自らも中退している。ケース18の高校は激しい荒れによって中退者が非常に多く、1年生の間にクラスの半分ぐらいの生徒が中退していき、「自分の好きな同級生がいなくなり、嫌いな生徒ばかりがクラスに残っていくので、居心地が悪くなっていった」と本人が語っている。

②対教師関係

次に、対教師との一対一関係において、本人が象徴的なエピソードを語るケースについて、一定の類型化を行う。まず、本人が対教師関係において理不尽な言動や対応を受け、それによって学校や教師に対する信頼を失った経験を語っているものを《不信》カテゴリーとした。その逆に、本人が教師に親身な対応を受け、その関与に対して本人が感謝の気持ちを示していたものを《親身》カテゴリーとした。

(a)《不信》カテゴリー

《不信》カテゴリーに該当するケースは、16件であった(1、2、5、6、9、10、11、12、13、16、17、18、26、28、30、33)。これらで語られているエピソードとして、例えば「(自分が中退する時は、)教師は『決めたことならしょうがない』というような人で、ただの“先生”という感じだった」(6)など、教師に対する軽い不信感を述べているものもあった。その一方で、教師に対する強い不信感を述べるエピソードも多く、例えば以下のようなものがあった。

- ・「入学式の時に服装検査があり、先生から地毛が赤いのを理解されず、『髪を染めているだろ!』といきなり髪をひっぱられた。この出来事から自分も素行の悪い生徒と同一視されていると感じ、先生に対して不信感を抱くようになった」(1)

- ・「先生は頭のいい子を優遇する傾向があった。（親しい友人から自分が嘘の噂を言いふらしているというデマを流され、）その噂が広まったのは、世界史の授業中で、先生にも聞こえていたはずなのに、無視して授業をしていて、それで先生に対して不信感を抱いた。（その後、2週間ほど保健室登校をし、辞められなかったら死にたいとまで思いつめ、）中退する前には学校側からの引き止めがあり、最後に学年主任の先生が『学校まで来て話を聞いてほしい』と電話してきたが、自分はいきたくなかったのも、母だけが行ったところ、『成績の良い生徒は残ってほしい』という内容だった。母は、『何も分かっていない』と『啖呵』を切って帰ってきた。それを聞いて、『先生たちは1人の人間じゃなくて成績を見ていたんだ』、『引き止めようとした先生たちって何だったんだろう』と思った」（2）
- ・「（中学校時代にも不登校を経験し、高校入学後も休みがちだったが、）担任の教師からは、『今から（学校へ）行けば単位は間に合うが、もう一日も休めない』と言われ、それが逆にプレッシャーとなった。また、『教師になってから今まで、中退者を一人も出していないから、そのスキル（＝経歴）を壊されたくない』とも言われ、それに対する反感や苛立ちもあった」（13）
- ・「校内で事件が起き、ある先生から、自分がその関係者であると疑われた。否定はしたが『土下座するまで帰らせない』と強硬に言われ、喧嘩になった」（12）
- ・「担任がPTAでも評判が悪い高圧的な先生で、みんなに向けて『学校に来ないやつは死んでしまえ』『遅刻したらぶん殴る』など暴言を吐いていた。遅刻や欠席に関する担任の指導は、特に自分に対して威圧的だった。理由は、中学の担任と仲が良く、『中学校時代に欠席が多かったのでもろしく頼む』と言われたからだそう。担任からの欠席は許さないというプレッシャーで心が折れて、学校を休む日が多くなっていった。秋ごろには出席日数が足りなくなっていた。（中退することを決意した後は、）学校からは引き止めもあったが、進学率を上げたいという都合が明らかだったので、自分では直接応じず両親を通して話をつけてもらった」（13）
- ・「先生は頭ごなしに怒って、『どうせ他人事』という感じで生徒のことを考えているとは思えなかった。（…中略…）中退した直接のきっかけは、先生と喧嘩したこと。喧嘩の原因はよく覚えていないが、いきなり怒鳴られたり、頭ごなしに怒られたから。たぶん授業を聞いていなかったからだ」（17）
- ・「先生の注意の仕方にカチンと来て『揉めて』しまい、無期停学になった。自宅で、学校から停学者に課せられる膨大な量の宿題を少しずつこなしていたが、友人が部屋に遊びに来たときに好意で一部手伝ってもらった。先生に提出する際、字体の違いでそれが発覚し、『正直に説明すれば許してやる』という先生の言葉を信用して事情を説明したら、それが決め手となって退学処分が決定されてしまった。後から、友人らも同じ先生の似たような対応によって退学を余儀なくされていたことがわかった」（30）

なお、教師に対する《不信》を、次のように児童会館の職員との対比から語っている例も見られた。

- ・「児童会館の職員は、友だちのような大人。学校の先生は自分を敵のように見てきたが、児童会館の職員はそうではない。雑談に付き合ってくれたり、こちらの話をよく聞いてくれる、貴重な大人」（18）

(b)《親身》カテゴリー

一方、《親身》カテゴリーに該当するエピソードを語っているケースは、7件あった(4、5、8、12、21、23、26)。《不信》カテゴリーと重複しているものもある(5、12、26)が、これらは、ある先生に対しては《不信》を抱くエピソードがあったものの、別の先生から《親身》にしてもらったというエピソードを語っているものである。以下、《親身》カテゴリーの例もいくつか紹介する。

- ・「(高校2年生になってから不登校になったが、)2年生のクラス担任の先生が親身になって色々な配慮をしてくれた。自分が学校に行けなくなってから、登校後に空き教室で自習できる措置を取ってくれたり、レストランに自分を連れて行ってくれて親身に話を聞いてくれた。(…中略…)留年決定後も、その担任の先生の親身な姿勢は変わらなかった。自分の場合はこのままこの高校に在籍していても状況が変わらないと判断して転学を勧めてくれ、通学可能な通信制高校を何校か具体的に紹介してくれた。転学先も、その中のひとつから選んだ」(8)
- ・「担任などの先生は、停学処分の際にかばってくれることもあった。また、通学の不便さから遅刻が重なって留年が危ぶまれることもあったが、実家の方面に住む先生が車で迎えに来ることもあり、ありがたかった」(12)
- ・「担任の先生との関係は良好だった。放課後、教室に残っていると『今日の授業、わからなかったら？』と話しかけてくれる先生もいて、他の先生とも良好な関係にあった。(…中略…)学校を休んでいる間、担任から電話があり、三者面談(担任、母親、本人)をした。学校に行かない理由を聞かれ、クラス内での友人関係の問題があることを話したところ、担任はすでに、級友に事情を聞いていたようだった。先生は、『辞めたらこれからが大変だぞ。教室に入りづらいのなら、違う部屋で1時間でも、30分でも学校で勉強して、そういう風に学校に来られないか』と別室登校を提案してくれた。『学校に通いたくなった時に連絡をくれるように』と先生の携帯番号を渡された」(23)
- ・「高校3年の頃、両親の仲がうまくいなくなり、家にいるのが窮屈になって、悩んで学校を休むこともあった。どうしていいかわからなくなり、部活顧問の先生に相談したところ、『自分を追い詰めるな。まずは、家族みんなでよく話し合うのがいい』と言ってくれた。(その後、両親は離婚。元々奨学金を借りて通学しており、離婚のよって益々家庭の経済事情が厳しくなったため、本人から母親に『中退して働きたい』と申し出た。)相談していた部活顧問の先生からは、『辞めるのは惜しいが、親を助けようという姿勢は今の子には珍しく偉い。がんばれ』と励ましてもらった」(26)

(3) 生徒間関係、友人関係

①小中学校での不登校経験

小中学校時代に不登校の時期を経験しているケースを確認すると、12件が該当した(1、3、7、8、9、11、13、17、18、25、32、33)。本人が語る要因はそれぞれ、友人関係からの孤立(7、8、11、33)、友人関係におけるいじめ(3、13、32)、友人関係との遊びを優先(17、18)、疾患に伴う長期入院(1、25)、「授業を受けるのが面倒になって」と述べるもの(9²²)などとなっている。

²² このケース9の小中学校時代の不登校の要因については、本人が「授業を受けるのが徐々に面倒になって学校を休むようになり、(…中略…)学校が厳しかったり、友人関係に問題があったわけではないが、元々めんどくさがり屋だったこともあって、ゲームなど自分の好きなことだけをして過ごしたいと思っていた」と語っている。

この 12 件のうち、高校入学後も似たような要因から通学が困難となり、それが高校中退の背景となったものとして、7つのケースが該当した（1、7、8、11、17、18、33）。

小中学校時代に生徒間関係・友人関係からの孤立を経験した 4 件（7、8、11、33）については、高校時代でも以下のような経験があったことを語っている。

- ・「高校入学当初から、クラスメートと馴染めなく、自分が周りから浮いている感じがした。周りの同級生は、必要以上に自分を良く見せようという感じや、思春期特有の異性に良く見られたいというような浮き立った感じが見えて、それが自分にはとても嫌だった。『ああ、（この中には）入っていけねえな』と思い、次第に通学する気持ちが離れていった」（7）
- ・「2 年生になってからも、1 年生のときと変わらずクラスの間関係から孤立してしまい、無気力感に襲われるようになって、次第に仮病を使って学校を休むようになった。欠席を繰り返すうちに、徐々に教室に顔を出すときの気まずさや、クラスに馴染まなければならないという強迫観念のようなものが出てくるようになった。教室へ行くことに次第に恐怖感を抱くようになって、教室に顔を出せなくなっていった。当時、同じ部活で下宿に住んでいた仲の良い友達が、朝の登校時に部屋をノックして迎えに来てくれることも度々あったが、合わせる顔がなくて部屋に籠り、居留守を使うことしかできなくなっていた」（8）
- ・「1 年生のクラスはみんな仲が良く楽しかった。クラス替えの際、1 年生のときに同じクラスで仲が良かった友達が一人もいないクラスになってしまった。その当時付き合っていた彼氏とも別のクラスになり、それらが精神的な負担になっていった。次第に学校から足が遠のいていき、高校 2 年の 5 月頃には単位不足で留年が現実味を帯びてきた」（11）
- ・「入学式から学校に行く自信がなくて欠席し、結局一度も行かないまま退学した」（33）

なお、生徒間関係・友人関係での孤立を経験した 4 つのうち 3 つは男性のケースであった。以下で見るように、女性のケースでは生徒間関係・友人関係に関する困難のエピソードとして、いじめや交友関係上のトラブルに関わるものが目立ったのと対照的に、男性のケースでは困難のエピソードとして孤立に関わるものが目立った。

残りのケースについては、高校時代においても友人関係との遊びを優先したことが高校中退の背景のひとつになったと見られる 2 つのケース（17、18）は、下記で別に取り上げる。ケース 1 は、中学校時代に発症した疾患が再び高校時代でも発症したことが高校中退の直接的なきっかけとなったが、このケースでは高校入学後に同級生からブログに実名で悪口を書き込まれるなどのいじめに遭い、「学校祭の準備が忙しくなって、同級生から『ちゃんと来なかったら罰金だよ』と言われ」たことなどから精神的なストレスが溜まり、それが疾患発症の要因になったものであった。

②いじめられた経験や友人関係上のトラブル

高校入学後にいじめられた経験を本人が述べているケースは、全部で 6 件あった（1、2、4、6、9、22）。いくつかの例を以下で紹介する。

- ・「クラスの中で何人かの男子が自分に対して、からかいや嫌がらせをしてることが悩みだった。クラスには仲の良い友人もいたが、いじめを受けている時は何もできず見て見ぬふりをする感じだった。担任の先生も話は聞いてくれたが、具体的な対応は特になかった。いじめは入学後 2 ヶ月あまり続き、学校に行くのが苦痛になり不登校になった。学校に行けなくなった時、両親には、泣きながら『もう学校には行きたくない』と打ち明けた」（9）
- ・「（高校）入学後の雰囲気は、出身中学からの進学者が多かったので、初めからクラス内で

グループができていた感じだった。自分は、いつも同じクラスの 5 人グループで行動していた。中退することになったのは、友人関係のもつれがあった。大きなきっかけはなかったが、小さなことの積み重ねで学校へ行きづらくなっていった。高校 1 年の冬休み前までに、仲良しだった 5 人グループの 1 人が家庭の経済的事情で中退しており、残りの 3 人と何かと対立するようになっていった。身体的ないじめはなかったが、ケータイやネットなどで悪口を書かれたことで揉めるようになった。その仲直りができないまま冬休みに入ったことで、休み明けから登校しづらくなった。冬休み明けから全く登校しない日が続いたが、2 月頃に先生の仲介によって話し合いを持ち、一応は仲直りという形になったが、その後も今まで通りにはならなかった。その後は、月 5 回くらいのペースで登校したが、2、3 ヶ月経った頃から、行けないのに授業料を払っているなら辞めた方がいいと考えるようになった」(22)

そのほか、とりわけ女性のケースにおいて、女性同士の生徒間関係や友人関係の中で苦痛を感じたと本人が述べているエピソードを、以下でいくつか紹介する。

- ・「女子特有の『集団心理』(＝過剰な仲間意識、被害妄想)から生じるトラブル(例えば男性問題、どちらのグループにつくのか、など)に日々巻き込まれた。そうした『集団心理』が理解できず、『心からの友だち』はいなかった。同じクラスで 8 名ほど中退しており、ほとんどは喧嘩(例えば被害妄想)であった」(4)
- ・「もともと大勢の女子の中にいるのが苦手だったが、女子クラスのドロドロした雰囲気嫌いだった。彼氏が教室に来たときに、冷やかしか陰口を言われていた。4 月下旬頃から陰口が増えて、クラスメートの話し声が気になって、いつも『自分のことを言ってるんじゃないか』と不安に感じるようになった。友だちにも助けてもらっていたが、しだいに耐えられなくなった。1～2 週間の保健室通いを経て、1 年生の 5 月初めに退学した」(6)
- ・「クラスの友人関係は女の子同士でグループを作り、そのグループの中に派閥があった。みんな仲が良いように見えても、同じグループ内の友達の悪口を言ったり、また、ちょっと挨拶をしないだけで、機嫌が悪くなる人がいたり等、些細なことが原因で小さいいざこざが起こるような人付き合いに煩わしさを感じていた」(23)

③遊びの仲間関係

小中学校時代の友人関係や、高校内外で形成された友人関係での、遊びを中心とした仲間との生活が、高校中退の背景のひとつとなったと解釈できるケースとして、13 件が該当した(4、10、12、14、15、17、18、19、20、21、25、30、33)。以下、いくつかの例を紹介する。

- ・「クラスのある友人の紹介で、学校外の交友関係ができたが、それは暴走族や暴力団とつながりのある集団であった(ただしメンバーになったのではなく、『お客さん』の扱いをされていた)。放課後、歓楽街で遊んだり、隠れ家に集まったりした。この付き合いが始まってから、夜遅くに帰宅し、制服のまま寝て、親と顔も合わさず、無言で学校に行くようになった」(4)
- ・「仲の良い生徒集団の中から交際相手もできた。しかし、『適当に選んだ高校』だったこともあり、気分やデートのために学校をサボったり、万引きを繰り返したり、『あまり良くない(＝素行の悪い)方向に流され』、『どんどん自分がダメになっていく』感覚を抱き始めた」(10)
- ・「高校入学前の春休みから、年齢をごまかして地元の居酒屋でバイトをしていた。友だち

が一緒だったこともあって、バイトは楽しかった。授業が終わるとバイトまで友だちと『だべって過ごし』、バイトの後は、門限の 12 時までは彼女の家で過ごしていた」（16）

- ・「授業はつまらなかった。学校に通うよりは友だちと遊びたかった。寿司屋でアルバイトをし、稼いだお金で遊んでいた。バイトが終わって 22 時ぐらいからそのまま遊びに行っていた。当時は自由に『夜遊び』（クラブやカラオケ）をし、楽しくて危機感のようなものはなかった。遊ぶのは高校や中学の友だち、アルバイトの先輩など様々で、周りに中退している人は多数いた」（19）
- ・「高校に入ってから夜の遊びを覚えて、学校の友だちと夜の街に出て普段やらないようなことをして遊ぶようになった。もともと勉強が好きではなかったなので、遊ぶことが楽しくなっていた」（20）
- ・「高校入学後も、中学校時代の友人とは仲が良く、よく遊んでいた。自分の高校は、制服も『真っ黒なセーラー服がダサくてダサくて』、友だちのかわいい制服がうらやましかった。また、周りには高校に進学しなかった友人も多く、水商売をしている人もいた。当時の交際相手も中卒で働いていたこともあって、高校は必要なのだろうかと疑問に感じるようになった。それまでは『遊んでもメリハリをつけて勉強していた』が、次第に『今までなんで親の言う通りにしてきたんだろう』と反抗するようになった。『もし高校やめても生きていける。アルバイトもあるし、いざとなったら水商売もあるし』と考えていた」（21）
- ・「高校では、友だちといえるのが楽しくて、そのためだけに学校に行っているようなものだった。入学後、友人らと問題行動に関わるが多くなった。『高校に入って浮かれてしまい、友だちと一緒に盛った勢いではじけ、悪のりした』ことが原因だった。そのため教師に目をつけられるようになり、よく一緒にいた友人が引き起こした他校の生徒のトラブルなど、自分が直接関わっていない問題でも疑われるようなことが度重なって、次第に教師への信頼も失われていった」（33）

（４）小括

第 2 項と第 3 項の分析にほとんど踏み込めていない段階で小括を行うことには、おそらくほとんど意味をなさないが、今後行う予定である分析の一定の見通しを示すものとして、暫定的な考察を以下で述べてみたい。

まず第 1 項で見てきた、学力、学校での勉強に関しては、高校中退の背景にも広く緩やかに関連していると見られる低学力の問題が、すでに小中学校の頃から始まっていると見るべきであろう。早期の段階から、学校の勉強から疎外されて、学校に通うことの意味を見出せないような経験が、高校入学前から積み重なっているケースが多いと想定される。それが高校入学後も引き続いて、高校に通い続ける目的を明確に持つことをできない点が、高校中退の背景と緩やかな相関を有していると思われる。低学力の問題は家庭の困難や貧困、障がいや疾患などの問題とも結びついているとも考えられ、言い換えると、これらの問題が学校経験としては低学力という形で具体的に顕在化している可能性も考えられる。したがって、学力や学校での勉強の問題を論じていくことは、社会的排除のリスクを抱える子どもたちをどう学校教育へと包摂するかという論点にもつながるものと思われる。もちろん一方で、低学力の問題とは別の次元で生じている高校中退のケースもあり、それはまた別の問題として論じる必要があることは確かであろう。ただし、小中学校や高校で、本人の学びへの関心を多様な形で受けとめ伸ばしていけるような教育の場を、社会の中にいかに用意するかという論点は、低学力のケースとそう

ではないケースの双方で共通する課題として、挙げられるように思われる。

第2項で見た、学校管理体制、対教師関係については、学校的価値観を背景にして、上から押さえつけるような形式的な指導を高校・教師が行うことにより、高校・教師に対する信頼を本人が失い、それが高校中退に至る背景となったケースが散見された。すでに学校の勉強に対して排除されてきた経験や、学校的価値観において疎外された経験を持っているケースでは、高校や教師のそのような対応は、高校生活からの離脱を決意する大きな後押しとなったものと思われる。なお、高校が厳格な学校管理体制を敷いたり、教師が厳しい生徒指導の関わりをすることについては、下位校に多く見られる学校の荒れを防ぐためでもあり、そこには偏差値で序列化されている高校教育制度や、貧困や格差が進行している現代日本社会の、構造上の影響も大きいと思われる。そのため、学校管理体制や対教師関係の課題を、ひとつの高校のあり方やひとりの教師のふるまい方の問題であるとして、そのあるべき姿を過度に問おうとすることは、返って教育制度や社会階層の構造上の問題を見えなくさせる可能性もある。

そして第3項で確認した、生徒間関係、友人関係については、高校中退の背景として、何らかの形で生徒間関係・友人関係が関わっていると見られるケースは多く、本人の生活世界のリアリティの中では、高校生活において生徒間関係・友人関係が大きな比重を占めていることが窺われた。ここまで述べてきたように、高校に通う目的を明確に見出せないようなケースにおいては、生徒間関係・友人関係が高校生活の意味として多くの比重を占めることになるのは、必然であるとも言えよう。しかし、とりわけ偏差値序列で下位に当たる高校においては、過去の経験や現在の生活環境においても苦しい何らかの事情を抱えた生徒が多く在籍していると考えられ、そういった生徒間で作られる不安定な人間関係の中では、何らかのトラブルを経験してしまうリスクが相対的に高くなると思われる。高校生活の中で生徒間関係・友人関係に大きな意味を見出さざるを得ない状況に追いやられ、そこですらも困難を経験したのであれば、高校を辞める判断につながっていくのは、止むを得ない事情と言ってよいかもしれない。本人は自らの決断として高校を辞める判断をしていったとしても、これらの背景を踏まえると、生徒間関係・友人関係を背景とした高校中退を、構造上の帰結として見ることもできるように思われる。

3 中退後の進路と生活

横関理恵・新谷康子・倉田桃子・小坂恭平・伊藤健治

本節では、高校中退後の進路と生活に焦点を当てる。一般的に、高校中退後の進路は、①高校に再入学し、卒業後に就職または大学等へ進学、②高等学校卒業程度認定試験（高認）に合格し、就職または大学等へ進学、あるいは中学卒のままで③就労、若しくは④無業という大まかに4つの進路に分けられる。本調査では、高校中退を広義に捉え「転学」「編入」も含めており、以下で見ていくように高卒資格の取得方法も様々であるため、①と②を区別せずに「高卒資格取得者」として扱う。本節では、まず初めに、大きな分岐点としての高卒資格取得の有無に焦点をあてる。その後、さらに詳細な6つのグループに別けて分析を行うことで、高校中退後の進路と生活の諸相を明らかにしていきたい。

（１）中退後の進路と生活の多様性

表１は、本調査で聞き取りをした 32 人の中退経験者に関して、調査時点までの進路をおおまかに整理したものである。対象者の年齢に幅があるため単純に比較することはできないが、同じ高校中退という経験を経ても、その後の進路や生活の状況は多様であることがわかる。それぞれのケースが固有の進路を辿っており、類型化に馴染まない要素も多い。しかし、この多様な様相を概観するため、まず高卒資格の取得に焦点をあて分析する。

今回の調査では、約半数のケースで高卒資格を取得していた。高卒資格取得者では、大学や専門学校への進学者も多く、高校新卒で正規雇用になっている者もいた。一方で、高卒資格未取得者では、アルバイトを転々とするなど不安定な就労形態が多く、調査時点で失業中の者やアルバイトが決まらないため家事手伝いをしている者もいた。

次に、表２は高卒資格の取得方法を示したものである。最も多いのは通信制高校であったが、そのうち半数は技能連携校やサポート校を利用していた。また、高卒認定を取得した場合も、予備校などの学習機関の利用や、通信制高校の単位を補うための高認取得など、学習の場への何らかの所属が見られた。

また、中退後に高校等の学習の場に戻るまでの期間も多様であった。通信制高校の 8 件中 7 件が転学や編入という形で空白の期間なく移行していたが、その他では 1 週間から数年間まで大きな幅がみられた（1 週間: 1 件、数ヶ月: 2 件、約半年: 2 件、約 1 年: 2 件、約 2 年: 1 件）。定時制高校の 2 件は新年度の再入学までの期間（半年から約 1 年）であったが、他にも学校等へ復帰するまで長期間あったケースでは、アルバイト生活または出産・離婚を経た後で学び直しを決意した者もいた（4、5、21）。このように、中退後に一定期間経た後で高校等に戻るケースもあるため、調査時点で「高卒資格未取得者」であっても、これから高卒資格を取得する可能性があり、中退後の経路は固定的ではない。また、空白の期間なく移行した場合であっても、実際には中退までの間に、数ヶ月に及ぶ不登校経験があるケースも複数みられ、中退後の移行期間の長さだけで各ケースの問題状況を捉えることは難しい。

（２）グループ別にみた進路の状況

ここでは、高卒資格取得の有無から現在までの状況をもとに、以下のように大きく 6 つのグループに分けて分析していく。なお、6 つのグループの中で、特に大きな割合を占める「高卒・進学」グループと「中卒・就労」グループを中心に検討する。分析の視点としては、i) 現在

表 1. 中退後の進路

Ⅰ．高卒資格取得者（15 人）				
内 訳 （進路の状況）	進学	大学在学中		6
		専門学校	在学中	2
			卒業	1
	進学の準備中	予備校生		1
		高校科目等履修生		1
	就労	正規就労		2
		非正規就労		2
高卒資格取得中（定時制・通信制高校在学中）				2
Ⅱ．高卒資格未取得者（15 人）				
内 訳 （進路の状況）	就労	正規就労		1
		非正規就労		10
	無職	求職中		1
		家事手伝い		1
		フリースペース利用者		1
		若者サポートステーション利用者		1

表 2. 高卒資格の取得方法（学習方法）

高卒認定	定時制高校		2
	通信制高校		8
	（うち技能連携校・サポート校を利用）		(4)
	予備校・塾		3
	フリースクール		1
高卒認定	通信制高校（併用で単位取得）		1

までの状況において特徴的な点を確認した上で、共通の視点として、ii) 家庭の状況と、iii) 進路形成に関わった人や社会とのつながり、に焦点をあて分析することで、各グループの差異を探っていきたい。

「高卒・進学」	: 高卒資格を取得した後、大学・専門学校に進学した者 ...①
「高卒・進学準備中」	: 高卒資格を取得し、就労しながら進学準備している者 ...⑤
「高卒・就労」	: 高卒資格を取得した後、進学せず就労している者 ...③
「高卒資格取得中」	: 現在、高等学校に在学している者 ...⑥
「中卒・就労」	: 高卒資格を取得せず、就労している者 ...②
「中卒・無職」	: 高卒資格を取得せず、就学も就労もしていない者 ...④

①「高卒・進学」グループ(9人)

本グループの対象は、高卒資格取得後に大学もしくは専門学校へ進学した者であり、大学在学中の6人(8、9、13、21、30、32)と、専門学校を卒業して就労中の2人(11、27)、専門学校在学中の1人(27)で、計9人が含まれる。

進学先としては、大学はすべて道内私立大学(4年制)、専門学校で既卒の2人は保育系(幼稚園教諭)と音楽系(ヴォーカル)、在学中の1人は動物飼育系である。年齢はすべて20代(20～22歳が5人、26歳が1人)、性別では、大学進学者は男性4人、女性2人であり、専門学校進学者は3人すべてが女性である。

i) 現在までの状況

まず、このグループの特徴として、中退した高校の学力的位置が比較的高いケースが多かった。上位校・中位校の5人すべてがこのグループである。また、下位校であっても、中学校での不登校によって高校進学が制約されたケースも多い(9、11、32)。このグループでは、多くの者が学習に対する苦手意識は少なく、中退以前から大学や専門学校等への進学に対して、ある程度の関心を持っていたと思われる。中退直後の精神状況としても、「大学に行けるか不安だった」と語るケースもみられた(13、21)。

次に、中退直後の進路では、通信制高校への編入が多く(8、9、13、20、21、30、32)、その他は、高認の受験を決めていたケース(11)と定時制高校への再入学を目指したケース(27)であり、すべてのケースで学習を継続することを早期に決めていた。なお、通信制高校への編入者では、再び中退したケースが2件(13、21)、5年近くの休学期間があるケースが1件(32)あったが、他のグループと比べると、中退後の経路としては比較的スムーズなケースが多い。また、通信制高校を中退した2件を含め、3件が高認を取得しており、進学手段の1つとして位置付いている。

一方で、大学・専門学校進学後の学生生活では、その充実度に関きがみられた。多くのケースでは、将来の目標に向けた充実した学生生活が語られていたが、一部からは、大学での人間関係で悩みがある(8、30)、授業にも関心が持てず大学生活が楽しくない(30)、卒業後の就職に関して不安がある(8、13)、といった状況が語られていた。

就労の状況については、本グループでは在学中の者が多いため分析は難しいが、専門学校を卒業した2つのケースでは、安定的とは言えないまでも概ね本人の希望に沿った就労ができていた。1人は幼稚園教諭の資格を持ち、私立幼稚園に就職するが二か月でやめている。その後、子ども服店でのアルバイトを経て、保育園で半年ほど働いた後、現在は歯科医院の受付として

正規雇用で働いている（11）。もう1人は、音楽の専門学校を卒業したのち、シンガーとしてクラブ等でライブ活動を行いながら生活している（20）。

ii）家庭の状況

本グループでは、家庭の経済的状況としては、安定しているケースが多い。ひとり親家庭は3件（11、20、30）あるが、生活保護等を受けているケースはなく、学費の支払い等に影響するような困窮した状況は、ほとんど見受けられない。ただ、多くのケースでは学費や家賃・生活費等を親が負担していたが、幾つかのケースでは、専門学校の学費を奨学金で賄う（11、27）、生活費だけはアルバイトで賄う（20、21）といった状況があった。

また、親の学歴でも、すべて高卒以上と他のグループより明らかに高く、学校教育や高卒学歴に対して、比較的高い価値意識を有していると考えられる。

iii）中退後の進路形成に関わる人や社会とのつながり

中退後において学習を継続していく際には、様々な人との関わりが影響していた。具体的には、中退時に教員から編入（通信制高校）を勧められたケース（8、20、21、32）、不登校等を心配した親（主に母親）が、他の高校での学びなおしを手助けしたケース（9、27、32）、通信制高校に通う友人の影響を受けたケース（30）、姉の影響から進学を決意し、姉と相談しながら高認取得のため予備校に通ったケース（11）があった。

また、大学進学に関しても、通い直した高校での教員からのアドバイス（9）や、学習塾の先生から高認取得を含め、大学受験のための様々な情報を得たケース（13、21）、不登校の支援者（大学教員）との出会い（32）によって進路を決めたケースもあった。

②「中卒・就労」グループ(11人)

本グループの対象は、高卒資格を取得せずに就労している者であり、正規就労の1人（19）と非正規就労の10人（12、14、17、18、22、24、25、26、28、31）である。就労形態に違いはあるが、正規就労の1人は、現在の職に就くまでに複数の非正規就労を数年間に及び経験しているため、状況の差異に留意しながらも同じグループとして取り扱う。また、性別は男性3人、女性8人と偏りがあり、年齢構成でみても、17～19歳が5人、23～25歳が3人、28～30歳が3人と大きな幅がある。特に10代のケースでは、これから進路が変化していく可能性が十分に考えられる。

i）現在までの状況

初めにそれぞれのケースの状況を、年齢層に沿って見ていく。まず、10代のうち女性3人は、コンビニや飲食店などでのアルバイトで、3人とも転職の経験があり、多いケースでは17歳で7つのバイトを経験していた（17）。男性のうち1人は、病気の母親を助けるために高校を辞め、不安定なアルバイト生活で家計を支えている（31）。もう1人は、主に運送業や土方など肉体労働の派遣をしてきたが、不安定な就労状況に将来の不安を抱いている（12）。次に20代半ばの層では、妊娠をきっかけに中退した女性は、厳しい生活状況の中で子育てしながらパートをしていた（14）。もう1人の女性は、コンビニや居酒屋でのアルバイトを経て、19歳からはホステスとして働き続けており、将来は結婚しか考えていないと語っている（28）。もう1人は、正規就労の男性である。16歳から飲食店や建設関係で非正規の職を転々とするが、将来の見通しのなさから20歳になる頃に正規の職を求めて、不動産の営業職に就いた。現在は、結婚もして安定した生活を送っている（19）。28～30歳の女性3人も、アルバイトなど非正規での転職を何度も繰り返している。現在の状況は、子育てをしながら介護の資格を取りパート

で働くケース（24）、パチンコ店で正社員として5年半働いた後、パートで介護職に転職したケース（25）、いつか調理師の免許を取って母親とお店を出したいと考えながらパチンコ店の派遣や知人のスナックを手伝っているケース（26）である。

全体的にみると、中退後について職種はサービス業が圧倒的に多い。また、本グループのすべてのケースで複数の転職経験があるが、正規就労の経験があるのは2件のみであり（19、25）、中卒で安定した職に就くことの難しさがうかがわれる。また、転職の際には、アルバイトがなかなか決まらない経験をしている者もあり（12、17、18、31）、不安定な生活を余儀なくされているケースが多い。

また、本グループでは進路等の希望として、専門学校への進学や資格取得が語られるケースが多くみられた。特に10代では、将来の安定した職業のために、美容や介護の専門学校への進学が検討されているが、お金や時間の問題によって現実的な見通しには至っていない（12、17、18）。それに対して、不安定な就労を長期間経験した20代では、仕事にすぐに活かせる資格を望んでいる（26）。実際に、通信教育などで働きながら介護の資格を取得した者もいた（24、25）。また、仕事探しなどで、中退による不利を実感していても、高卒資格の取得に関しては、消極的な見方がほとんどであった。しかし、ある10代のケースでは、今から高校に通おうとは思わないが、高認取得に向けた児童会館での学習支援には関心があると語っている（18）。本グループの傾向としては、学校復帰というよりは、高卒資格や学習に対するニーズが高いと考えられる。

ii) 家庭の状況

本グループでは、経済的に厳しいケースが比較的多く、ひとり親家庭も7件あった（14、17、18、24、25、26、31）。ただし、経済的には安定した家庭も複数あり（12、22、28）、一概に経済的要因によって規定されているとも言えない。なお、親の学歴では、他のグループに比べて、中卒や高校中退が多くみられた（12、14、17、31）。

また、本グループには、経済的な理由によって中退したケースが3件あるが、中退後も在学中のアルバイトが継続され、そのまま不安定な生活が継続されている（24、26、31）。その他にも、中退後に学習の継続を希望しながらも学費負担から諦めたケースもある（18）。

一方で、経済的に安定した家庭においては、家族から通信制高校を勧められたケースもあった（22、28）。このような提案に対して、「勉強が嫌い」（28）、「これ以上、親に迷惑をかけたくない」（22）という理由から学校へ戻らず就労を選んでいた。

iii) 中退後の進路形成に関わる人や社会とのつながり

中退直後の意識では、身近に中退者がいるため不安を抱いていないケース（12、17、18、19、25）と、不安を抱きながらも相談できる相手がいないケース（22、24、26、28、31）とに大きく分かれていた。本グループでは、進路形成に影響を与えた関係性は限定的で、その多くは友人関係であった。多くの者が、友人の紹介等によって仕事を見つけた経験があった（12、19、24、25、26、28）。その他に、親の仕事を手伝っている者もいた（22、26）。また、求職方法としては、求人情報誌やインターネットなどの利用が多く、ハローワーク等の公的な機関は、ほとんど利用されていなかった。若者サポートステーションやジョブカフェについては、認知度自体が非常に低く、社会的な支援に関する情報が必要とする人に十分に届いていない状況がうかがわれた。

③「高卒・就労」グループ(4人)

本グループの対象は、高卒資格を取得後、進学せずに就労している者であり、正規就労の2人（2、10）と非正規就労の2人（4、6）である。18～23歳の女性4人である。

i) 現在までの状況

まず、正規就労の者に関して、1人は、専門学校への進学を経済的な理由から断念し、教員のアドバイスを受けながらハローワーク経由で福祉関係の会社に就職している。調査時点では、まだ研修期間中であった（2）。もう1人は、定時制高校に再入学後、職場体験で訪問した介護施設に関心を持ち、その後もボランティアとして積極的に関わり、就職活動の際に自ら施設に打診をはかり内定を得た。こちらは働き始めて1年弱になる（10）。

次に、非正規就労の2つのケースでは、両者とも正規雇用を求めた就職活動はせず、求人情報誌等で非正規の仕事（登録型派遣やスーパーなど）に就いている。その背景には、交際相手との関係が意識されていた。ただ、両者とも将来の職業的な希望や専門学校への進学意欲についても語っているため、全くの専業主婦志向ではないが、異性関係に大きく規定された不透明な進路展望となっている。

ii) 家庭の状況

本グループでは、ひとり親家庭が2件で、生活保護の受給経験がある1件を含めて、4件すべてのケースで経済的に厳しい状況があった。中退後の学習継続にあたっては、比較的高額な負担となるフリースクール関係を利用した3件は、大学進学のための貯えをあてたり（2）、親族から援助を受けたり（4）、通信制高校には所属せずに高認を利用する（6）、など厳しい家計状況がうかがわれた。また、定時制高校の者もアルバイトで家計を助けており（10）、本グループの者達は、進学の展望を描くことが難しかったと考えられる。

ii) 中退後の進路形成に関わる人や社会とのつながり

中退後の進路支援については、4件とも高校からは得られていない。学習の場に戻ったきっかけとしては、家族からの勧め（10）、フリースクールを舞台にしたマンガ（2）、通い直せる学校をインターネットで調べた（2、6）、中退して半年後に友人から誘いを受けた（4）、というケースがあった。また、4件とも通い直した学校等での友人関係や学校生活を、有意義だったと肯定的に評価している。「中退して良かった」と語るケース（2、4、6）や、高校での就職指導等のサポートを受けて進路を切り拓いているケース（10）があり、学校体験が中退後の進路形成に影響を与えていた。

④「中卒・無職」グループ(4人)

本グループの対象は、男女2人ずつの4人である。年齢も様々で共通点は少ないが、現在の状況から大きく分けると、求職中で「中卒・就労」グループに近いケース（15、23）と、次の進路に進むための課題と向き合っている状態のケース（1、7）がある。

i) 現在までの状況

まず、求職中のケース15の場合では、中退後に不安定な就労形態で転職を繰り返していた。中退後すぐに親元を離れて暮らしているが、経済的には非常に厳しい状況にある。25歳になった現在は、安定した仕事に就くためには運転免許が必要だと考えて自動車学校に通っており、取得後に本格的に仕事を探す予定である。もう一方のケース23の場合は、中退後にアルバイトをするが短期間で辞めてしまい、その後仕事が見つかっていない。ハローワークにも行ったが、当時17歳という年齢がネックになり、該当する求人は殆どなかった。アルバイトも、飲

食店やショップ店員など、いくつも受けたが決まらなかった。両親からの提案で、5ヶ月ほど前から、家事の手伝いをしてお小遣いを貰っている。最近では、一度は諦めた専門学校に通うことも検討し始めている。

また、次の進路への課題と向き合っている状態としては、ケース1では、持病を抱えているために社会に出る上でのハンディがある。高校を健康上の理由で中退した後、編入できる高校も見つからず、現在は、フリースペースに通っている。家にこもっていた期間もあり、コミュニケーションなど社会性に不安もあるため、今は人と接していく段階で、その後、バイトや学校に進むという道筋を考えている。ケース7の場合では、中退後に非正規雇用で複数の仕事を経験してきたが、28歳の時にトラウマ的な離職を経験し、その後は無職期間が約2年続いている。現在は、2ヶ月ほど前から、仕事をする自信を付けるために、若者サポートステーションに通っている。

ii) 家庭の状況

中退時における家庭の経済的状況は、概ね安定していた。現在も、親元で暮らす3件は家庭の経済的状況に依存して生活している(1、7、23)。しかし、対立的な親子関係により離家を迫られたケース(15)や、無職期間が長くなる内に父親が失業し家計状況が悪化しているケース(7)もあった。

ii) 中退後の進路形成に関わる人や社会とのつながり

中退後の求職手段は、求人情報誌の他、友人・知人からの紹介など「中卒・就労」グループとほぼ共通である。学校等への復帰に関しては、親が専門学校へ通うことを認めていても、通い続ける自身が持てないために諦めたケースがあった(23)。社会的な支援との関わりでは、フリースペースと若者サポートステーションの利用があったが、全体的には、限られた範囲の狭い関係性の中で生活している様子がうかがわれた。

⑤「高卒・進学準備中」グループ(2人)

本グループの対象は、高卒資格取得後に働きながら進学を目指す者で、一児の母である20歳の女性(5)と、浪人期間が10年近くになる28歳の男性(16)である。

i) 現在までの状況

ケース5の場合では、中退してすぐに妊娠が発覚して結婚している。その後、夫の収入も低く生活が困難になって離婚する。離婚を機に自立を目指し、看護学校への進学を考えた。高卒認定を取得し、現在も予備校に通っているが高い学費が壁となっている。さらに、仕事と育児の負担もあり、学習へのモチベーションを維持していくのも難しい状況がある。

一方、ケース16の場合は、編入した通信制高校を卒業後、大学受験に失敗し、アルバイトをしながらの浪人生活が10年近く続いている。現在は、親元を離れ、新聞配達をしながら、昼間定時制高校の科目等履修生として受験勉強をしている。学力面・経済面での見通しは厳しい。以上のように、本グループの両ケースは、進学を目指しながらも実現の見通しは厳しく、「高卒・進学」グループの状況とは大きな違いがみられた。

ii) 家庭の状況

中退時の家庭の状況は、両ケースで対照的であった。ケース5は、両親とも中卒であり、父親は療養中で無職である。母親はパートで生計を支えるが生活保護を受給している。中退の背景としても家庭の経済的な要因があったケースである。そのため、専門学校への進学に関しても家庭からの経済的支援は望めない。一方、ケース16の家庭は比較的安定しており、中退後

の通信制高校とサポート校の学費負担を引き受けている。ただ、長期間に及ぶ浪人期間については、両親からのプレッシャーを感じている。

iii) 中退後の進路形成に関わる人や社会とのつながり

ケース 5 の場合では、中退後の進路形成に関わって、ほとんど誰からも支援を受けることができておらず、今後の見通しも厳しい。一方、ケース 16 の場合でも、通信制高校へ編入するまでの過程では、家族は「説得」の対象として位置づけられており、「唯一の相談相手は、進学情報誌」だったと語られている。浪人生活においても表立った社会的支援の存在は確認できず、周囲との人間関係も断続的なものになっていた。

⑥「高卒資格取得中」グループ(2人)

本グループの対象は、高校に在学中の、19 歳（3）と 22 歳の（33）男性である。

i) 現在までの状況

中退後の経路をみると、同じように高校在学中であっても、経過は大きく異なっている。ケース 3 は、翌年に全日制高校に再入学するも入学式の翌日から停学処分を受け、そのまま中退し、更に翌年、定時制高校に再入学している。一方、ケース 33 は、中退後にアルバイトや無職の期間など不安定な生活を 4 年ほど送った後で、友人からの誘いをきっかけに通信制高校へ再入学したケースである。また、現在、両者とも 3 年生だが、進路展望も異なっている。ケース 3 は、専門学校への進学を希望していたが経済的に厳しく、アルバイトをして貯金しながら正社員への登用の可能性を探るか、身内の家業を継ぐことを考えている。一方、ケース 33 は、奨学金を得て自動車整備の短大へ進学予定である。

ii) 家庭の状況

両ケースとも家庭の状況は不安定である。特にケース 3 では、ひとり親家庭で、母親は体調に不安があるため、生活保護を受給している。そのため、母親の就労状況を詳細に把握して自身のアルバイト収入を家計の足しにしている。一方でケース 33 は、昔から両親の不仲など家庭環境に不安定な面はあったが、経済的には中退当時は比較的安定していた。中退後も、長期間の無職を経験するなど家庭に支えられて生活していた。しかし、高校に再入学する頃には、父親の失業によって家計状況が悪化しており、それが本人にとっても将来を真剣に考える一つのきっかけとなっていた。

ii) 中退後の進路形成に関わる人や社会のつながり

本グループでも、社会的支援との関係については、両ケースとも見受けられない。しかし、両ケースとも家族との関係が進路形成に影響を与えていた。ケース 3 では、母親による高校卒業への一貫した期待と助言が本人を後押ししていた。ケース 33 では、両親の高校卒業に対する期待は高くないが、不安定な生活状況を家庭が支えていた。そして、求職活動での困難や父の失業を経験して将来を考えるようになった時、友人から高校再入学の誘いがあった。アルバイトをしている時期にも誘いを受けていたが、当時は高校に通い直すことなど考えてもいなかったと語っており、本人の状況の変化によって高卒資格取得への意識も大きく変化していることがわかる。

（3）小括

本節のまとめとして、「高卒・進学」グループと、「中卒・就労」グループの差異を軸にしなから、各グループの比較を行っていく。

まず、「高卒・進学」グループと「中卒・進学」グループでは、家庭の経済的な状況が最も

大きな差異として特徴的に現れていた。つまり、家庭における安定した経済的基盤が後ろ盾となることで、中退後に学習を継続し、さらに大学・専門学校へ進学することが可能となっていた。また、家庭の経済的状況は、単純に学費負担の可否だけではなく、「本人の進学意識」や「進路形成に関わる人や社会とのつながり」に関しても影響を与えている。

進学意識に関しては、安定した家庭では、学歴・学校教育に対する価値意識も高い傾向が見られ、本人が学習を継続する上で精神的な支えになっていたのに対して、家庭の経済的基盤が脆弱な場合には、進学を希望しても学費負担が壁になることで進学に対する意識も継続しにくくなっていた。また、つながりに関しても、「高卒・進学」グループでは様々な関係性が確認されたのに対して、「中卒・就労」グループでは家族以外には友人や職場の人間関係など狭い関係性に限定されていた。不安定な生活状況が外の社会との関わりの幅を限定し、不安定な就労状況にとどまらせ、余裕のない生活から抜け出すことを困難にしている様子が見えてきた。

次に、その他のグループとも比較して検討する。まず、「高卒・就労」グループは、「高卒・進学」と「中卒・就労」の中間に位置するグループである。このグループの家庭状況はあまり豊かではないが、多くの者が中退経験を肯定的に捉え、現状にも概ね満足しており、それなりに充実した生活を送っている様子であった。家庭状況としては「中卒・就労」グループに近いが、復帰した学校経験によって高校中退で傷ついた自己肯定意識を取り戻し、積極的に将来展望を描けるようになっていた。そこでの学校経験とは、友人や教師との関係性をつむぎ直すだけでなく、進路指導や就労支援の面でも影響を与えていた。

「中卒・無職」グループは、求職中など一時的な無職状態のケースでは「中卒・就労」グループと同じような状況もみられたが、病気や年齢など様々な要因によって、非正規の仕事に就くことにも難しさを抱えていた。これは、高校を中退して働いていくことの困難な側面が、より顕著に現れたものであり、家庭の経済的問題だけに還元されない社会的な支援の必要性を強く感じさせるケースでもある。

「高卒・進学準備中」グループは、一見すると「高卒・進学」グループに類似しているようであるが、実際には大きな差異がみられ、経済面を中心に進学の実現には厳しい状況にあった。家庭の支援を得難いことに加えて、社会的なつながりも限られており、目標の実現を可能にするだけの十分な支援が得られる見通しは立っていない。

最後に、「高卒資格取得中」グループは、高校卒業の重要性・必要性を強く感じているケースであった。家庭は経済的に厳しい状況であったが、母親からの強い希望による精神的な後押しや、不安定な就労状況から高卒の必要性を強く感じたことによって、高校への再入学を決めていた。しかし、高卒後の進路展望においても、やはり経済的な問題が現れており、今後の見通しは不透明である。

以上のように、中退後の進路と生活は、家庭の状況から最も大きな影響を受けていた。しかし、それぞれのグループの状況を検討していくと、学校経験による影響や、時には偶然的な人とのつながりなど、進路形成には様々な要因が影響しており、そこでは社会的支援の不在状況も明らかになってきた。今回の分析では、中退後の進路の多様性を明らかにすることに焦点をあてたが、今後の課題としては、経済的な問題にとどまらない様々な要因を明確にした上で、支援の在り方を検討して行く必要がある。

4 ジェンダーによる差異

横井 敏郎・福岡 諒・福田 沙也佳

本節は、男女（ジェンダー）による差異という点から検討を加えたい。先に説明したような調査方法を採用したことから、年齢は17歳から30歳までにわたっており、高校中退をしたばかりの者から中退後10年以上を経過した者まで幅が広い。したがって、ある事象や要因などについてケースの比率を論じることはあまり意味がない。ここではジェンダー間の差異を示す事例をいくつか取り扱うという叙述方法をとる。

以下では、大きく中退までと中退後に分けて、男性12名、女性20名のケースを検討する。

（1）高校中退まで

本人が中退の理由あるいは経過について語っていることをもとに男女それぞれのケースを分析すると、以下のように分類された。

【男性】

- ①友達づくりやコミュニケーションに躓き、あるいはいじめを経験するなど、人間関係構築の困難を抱えたケース（7、8、9）。この場合の多くは小・中学生時代を含め、中退までに不登校経験を伴っている。
- ②そもそも学業・通学に対する意欲が低く、遅刻欠席が続いて単位が足りなくなったり、校内で教師とトラブルを起こしたりして退学に至ったケース（12、15、19、30、33）。この事例では、飲酒・喫煙等「非行」に走った者もあり、①のパターンとは対照的に、いわゆる「やんちゃ」なタイプの男子が当てはまると思われる。
- ③高校の厳しい管理主義的な教育への反発、教師への不信から退学したケース（16）。学習意欲がないわけではなく、中退後すぐに通信制高校へ編入している。
- ④家庭の経済的事情から、自らも働く必要があったケース（31）。
- ⑤その他：トラブルの対処とそれに伴う精神疾患の発症・治療のため退学したケース（3）。中学時代に不登校になり、ほとんど高校に通学することなく中退したケース（32）。

【女性】

- ①友人関係で孤立したり対立したりしたことが直接のきっかけとなって中退したケース（2、4、6、11、18、22、23、27）。
- ②高校の厳しい管理主義的な教育、教師の威圧的な態度への反発やあきらめによるケース（13、17、21）。
- ③学校外の遊びに意識が傾いて学業に身が入らず、校則違反を犯す場合もあって、単位が不足して退学に至ったケース（4、10、18、20、25、28）。
- ④家庭の経済的事情から辞めざるを得なかったケース（5、24、26）。バイトを行うために高校生活との両立が難しいと考えたケース（17、18）。
- ⑤その他：自分の病気への対応困難を理由に学校が退学を強要してきたケース（1）。在学中に妊娠がわかり、出産・育児のため退学したケース（14）。

男性女性とも、高校中退に至ったきっかけ、直接的な理由としては、a)人間関係の問題・困難、b)学業への意欲喪失と学校外での遊び等への意識の傾き、c)学校の管理主義的体制への反発・あきらめ、が相対的に多くなっており、経済的困窮をあげた者は少数にとどまる。

しかし、上の分類は、男女とも、中退に至る過程・背景のある部分を切り取ったものであり、

実際にはより複合的に中退は生じていると考えるべきであろう。たとえば、学業に身が入らなくなったパターンの1つであるケース 15 は、家庭の親子対立が当人の行動のきっかけになっているように、家庭のありようが子どもの学校生活のあり方に強い影響を与えている場合がある。また、特に女性の場合に顕著であるが、親が離婚を経験している者が半数を占め、また親の失業や生活保護受給など、経済的に恵まれない状況にある者も少なくない。よって、全体としてみると、家計や家族関係の不安定が基礎にあり、学校での友人関係や対学校・教師関係の問題を媒介に中退に至っているといえよう。

それでは、女性の妊娠・出産のケースは別にして、男女に差異は見られないのだろうか。ここでは、男女ともに中退理由として挙げられている a) 人間関係の問題・困難について詳しく見ておきたい。人間関係の問題・困難と言っても、その実態は男女で異なるように思われる。

男性の場合、「入学当初からクラスメートと馴染めず、自分が浮いている感じがした」(7)、「転校して友達ができず孤立してしまい不登校に。友人関係を結ぶ事に苦手意識を覚えた」(8) と言うように、友人関係をうまく築くことができずに中退したという者が複数いる(男性の分類①)。

女性の場合も、学校が進める集団的な学級づくりになじめない者もあり(27)、「1年生のときに仲の良かった友達がクラス替えをきっかけにいなくなり、精神的な負担になって・・・」と話すケース(11)もあった。しかし、単にクラスになじめなかったというだけでなく、「女子特有の集団心理」や「どろどろした関係」という言葉で人間関係の問題を語る者が複数いた(1、2、4、6)。友人関係の対立が中退理由となっているケース(22、23)も、類似の人間関係の問題の存在をうかがわせる。

同じ人間関係の問題といっても、男性の場合、何らかの理由でコミュニケーションを取ることができずクラスで孤立したケースが見られたが、女性ではグループ対立や少人数の友人関係内からの孤立といった形で困難に陥ったケースが見られるのが特徴である。女子生徒の人間関係は、そこから孤立すると学校での居場所を失うほど、彼女たちの学校生活において大きな位置を占めているようであるが、この点についてはさらなる精査が必要である。

(2) 高校中退後

次に、高校中退後の進路と生活における男女の差異について検討しよう。中退後の進路(現在の状況)を男女ごとに見ると、次のように整理された。

【男性】

- ① 大学進学(在学中) 4 名
- ② 高校在学中 2 名
- ③ 正規雇用 1 名
- ④ 非正規雇用(求職中含む) 3 名
- ⑤ その他(無職 1 名、アルバイトしながら高校科目等履修生 1 名)

【女性】

- ① 大学進学(在学中) 2 名(休学中 1 名含む)
- ② 専門学校進学・在学中 1 名
- ③ 専門学校進学・卒業 2 名(正規雇用 1 名・自由業 1 名)
- ④ 高卒 3 名(正規雇用 2 名・非正規雇用 1 名)
- ⑤ 高認取得 2 名(ともに非正規雇用、1 名は看護予備校在学中)

⑥ 非正規雇用 7 名

⑦ その他 3 名：家事手伝い 1 名、子育て中 1 名（パート）、フリースペース利用 1 名（アルバイト経験あり）

この分類は、年齢幅が広い対象者の現時点での状態を整理したものにはすぎないが、まず男女ともに、高校中退後、高校にもどったり、高認試験を受けたりして、高卒資格を取り、大学・専門学校等に進学している者がいることがわかる。これらの者は、高い学費を支払うだけの経済的資力が家庭にあると考えられる。

男性の③～⑤を見ると、正規雇用で働いている者は 1 名しかいなかった。これは非正規雇用を渡り、その後学歴不問の正規職に就くことができた者で、まれなケースといえよう。この者だけが、男性で結婚して所得的に安定した世帯を形成できている（年収 800 万円）。しかし、④非正規雇用の 3 名は職を渡り歩いている状況にあり、そのうち 2 名は恋人がいるが結婚よりも安定した仕事を見つけることが先の課題となっている。⑤その他のうち、無職（7）は非正規で 10 年程度働いてきたが失職し、次の職を見つけられない状態にあり、もう 1 名は大学進学浪人が長期化して、やはり次の展望が見えにくい状態にある。この 2 名は 30 歳、28 歳であり、今後の見通しが立たないために、内面では深刻な葛藤を抱えることになっている。

女性の大学・専門学校進学者以外を見ると、高卒で正規雇用に就いた者が 2 名いるが、いずれも学校の支援、紹介があって職を見つけることができています。高校を卒業したが非正規で働いている 1 名（4）は、結婚を前提にして非正規雇用を選択しており、家庭的にもそれでやっていける基盤がある。

しかし、これら以外の女性は、全体として安定的な生活や雇用にある者は少ない。⑥非正規雇用のうち、20 代後半で介護職の資格を取っている者（24、25）もいるがパートである。⑤の 1 名（5）は結婚・出産後、離婚して、非正規雇用で働きながら資格取得を目指している。⑦の 1 名（23）は年齢の問題で仕事が見つからず、別の 1 名（14）は夫の実家で同居しており、子育てしながらパートをしている。このように女性で高卒資格なしの場合、正規の仕事に就くのは難しい状況にある。また、結婚予定によって正規雇用に就きにくい場合があり、結婚・出産した場合、家計の厳しさと子育て等の負担から自立した生計を営むことも正規雇用に就くことも難しいケースが見られた。インタビューで、ケース 4、5 が「自分 1 人で食べていける仕事を見つけない」、「1 人で生きていくために資格を取りたい」と言っていたのが印象的であった。

以上を簡単にまとめてみよう。高校中退後の進路と生活は、一定の家庭的背景をもとに大学・専門学校に進学している者もいれば、またそうでなく非正規雇用や無職で不安定的な状況におかれている者もあり、その点で男女には大きな違いはない。しかし、女性の場合、1 人で食べていけるような仕事を見つける道が狭く、結婚との関係で雇用や生活に制約がかかっているケースもあって、多くの者が働く場合は非正規にとどまらざるを得ない状況があった。他方、男性にとっては、世帯を形成できるだけの仕事を見つけることとそのための学歴を得ることがより大きな意味を持っていることを示唆するケースが見られた。

（3）小括

今回の対象者の中には、家庭の生計が安定しており、高等教育に進学しているケース、また高校にもどって卒業し、仕事に就いているケースが見られた。他方、経済的にあるいは家族関係において困難をかかえる家庭の場合、高校にもどらず、次の進路を見つけるのが難しい状況におかれている者が多い。これらの点については男女に大きな差異はないように思われる。

しかし、高校中退後の進路と生活を見ると、男女間の差異も見いだされた。女性の場合、結婚が雇用形態に作用しているケースがあり、出産・子育てが加わるとさらに雇用の範囲が狭まる。もともと高校中退学歴では雇用の選択肢が狭いが、これらが女性にいつその雇用の制約を負わせることになる（もちろん結婚のあり方によるが）。他方、男性の場合、独立世帯を形成できる経済力をもつことが当然の価値とされており、安定した正規雇用あるいは前提としての学歴の獲得がより大きなプレッシャーになっている。

なお、中退理由と中退後の軌跡には一定の関連があると考えられるが、今回はそこまで含めて男女差を分析できなかった。今後の課題としたい。

5 高校中退に関する当事者解釈

杉山晋平・谷口知弘・森田清太郎

（１）分析課題と方法

本節では、ヒアリング調査という場面において、当事者が高校中退に至る経緯から現在の状況までを語った後に、自らの中退経験をどのようにふりかえり解釈していったかという点について分析を試みる。前節までの分析は、主として高校中退という事態が生じていく過程の構造的な把握を目指すものであった。それに対し、本節の分析は、当事者の語りを通して、高校を中退するという経験がどのような現実として、どのように再構成されていくのかに焦点を合わせたものである。

分析結果の提示に先立ち、いくつかの方法論的な前提について触れておく。「語り（narrative）」という分析概念は既に学問分野をこえて多くの研究者に知られ、臨床領域においては新たな実践的方法としても注目されてきた。

「語り」とは、語り手が無数の出来事の中からいくつかを選択し、それらに時間的秩序を与えて互いに関係づけていくことで特定の解釈を表現する「行為」とすると同時に、その「産出物」を指す²³。本節では、ケースレポートをその「産出物」として位置づけ、当事者によって表現された解釈の内容とそれを支える出来事との関連性について検討したものである。

ただし、今回の分析は未だ中間整理の段階にとどまるもので、いくつか確認しておくべき点があると考えられる。まず、分析の対象となったケースレポートは、当事者の語りそのものというよりは、2時間程度のヒアリング場面の音声情報を“要約的に”文字化し記述したものである²⁴。したがって、ケースレポートはその作成者による解釈の産出物でもあるという点に留意が必要である。

また、「行為」としての語りを成す語り手と聞き手の関係性やヒアリング調査という場面の性質を加味した分析も今後必要となる²⁵。分析課題に即してよりつぶさに当事者の解釈にせまる方法論を洗練していくことは、引き続き検討を要する課題としておきたい。

²³ Elliot, J., “Using Narrative in Social Research”, Sage Publication, 2005

野口裕二「ナラティブ・アプローチの展開」（野口裕二編著『ナラティブアプローチ』pp.1-25、勁草書房 2009 年）

野口裕二『物語としてのケア：ナラティブ・アプローチの世界へ』医学書院、2002 年

²⁴ エマーソン、フレッツ&ショウ『方法としてのフィールドノート：現地取材から物語作成まで』新曜社、1998 年（Emerson, R.M., Fretz, R.I., & Shaw, L.L., “Writing Ethnographic Fieldnotes”, The University of Chicago Press, 1995, 佐藤郁哉・好井裕明・山田富秋訳）

²⁵ ホルスタイン&グブリアム『アクティブ・インタビュー：相互行為としての社会調査』せりか書房、2004 年（Holstein, J.A. & Gubrium, J.F., “The Active Interview”, Sage Publication, 1995, 山田富秋・兼子一・倉石一郎・矢原隆之訳）

なお、今回の分析に用いたデータは、「ケースレポート（特に「D-②：中退の自己評価）」及び「ヒアリング内容をテープ起こしたテキスト」である。後者については、先に述べた留意点を踏まえ、必要に応じて本人の「語り」の細部を確認するために参照した。

個々のヒアリング調査は、ケースレポートの構成に示されている通り、「＜A＞生い立ちから高校入学まで→＜B＞高校中退に至る経緯→＜C＞中退後の状況」というシークエンスに沿って進められた。当事者自身の中退経験に対する解釈は、最後の「＜D＞中退評価と支援」というセクションに設定された話題である。したがって、「D-②：中退の自己評価」は、語り手と聞き手がともにそれ以前に語られた＜A＞～＜C＞における出来事や経験を参照しながら語りを形成できる位置を占めている。本節の分析においても、中退経験に対する解釈に関連づけられた出来事や経験の詳細については、それ以前の＜A＞～＜C＞の情報を参照することとした。

分析の手続きであるが、3名の分析者で各ケースレポートを比較検討し、中退経験に対する解釈内容を分類するカテゴリーについて吟味するというデータセッションを実施した。次に、それらの解釈を成り立たせているのはどのような出来事や経験で、それらが実際の語りの中でどのように解釈に関連づけられているかという視点からパターンの抽出を試みた。その結果を踏まえて、分析者の1人である杉山がケースレポート全体の再分類化を進め、必要に応じてカテゴリーやパターンに修正を加えながら分析結果を執筆した。

なお、本節の分析は、分析者が当事者の解釈に関連する出来事や経験を推測して関連づけていくのではなく、あくまで語り手自身がその語りの中でどのような出来事を関連づけながら中退経験をめぐる解釈を表現していったのかに注目するという、構成主義的なデータ理解を志向したものである。

（2）解釈内容による分類

初めに提示するのは、当事者による中退経験の解釈内容についてである。その内容は、「評価」という調査項目の表現に象徴されるように、「中退してよかった」、「中退しなければよかった、しないほうがよかった」といった形式での分類が可能であった。前者の内容に「肯定的」、後者に「否定的」という分類カテゴリーを設定した。

しかし、より重要なのは、そのような「よかった⇔よくなかった」といった一義的な解釈に方向づけられた語りのケースばかりでなく、むしろ、相対する評価が折り重なったり、並置されたりしながら自らの中退経験を解釈しているケースが半数以上にのぼったという点である。それらのケースに対しては、「多義的」という分類カテゴリーを設定した。

また、3つのカテゴリーのいずれにも含められないケースも確認された。例えば、「よいとも悪いとも言えない」、「（中退経験に）こだわりのない」と明示してこの話題を打ち切ったケースが該当する。そのようなケースについては「評価せず」というカテゴリーを設定することとした。

表3 中退経験に対する解釈内容による分類

	肯定的	否定的	多義的	評価せず
ケース数	8 (25.0%)	2 (6.3 %)	19 (59.4%)	3 (9.4%)

（ ）内は全ケース数に対する割合（四捨五入しているため合計は100%にならない）

中退経験に対する解釈の内容を「評価」という観点で分類すると、全体として表3の結果が得られた。母集団の規模、調査協力者の属性、調査及び分析方法について検討の余地を残しているものの、高校中退について「否定的」な解釈が一義的に語られたケースは、2件しか確認されなかった。むしろ、「多義的」な評価を語るケースの割合の高さからは、個々人において中退経験に対する解釈に葛藤や揺らぎが内在している可能性がうかがえる。

では、これらのカテゴリーに即して、具体的にはどのような解釈が、どのような出来事や経験との関連で語られていったのかをみていきたい。

(3) 各カテゴリーにみられる語りのパターン

①「肯定的」な解釈

表4は、このカテゴリーに含まれるケースについて「当事者の語り」と「解釈に関連づけられた経験」とを抽出し、それらの関連を一覧表として整理したものである。ここで「肯定的」な解釈に含めた8つのケースの語りを取りあげると、「中退してよかった」という評価を支える出来事や経験の関連づけに大きく2つのパターンが認められた。

表4 「肯定的」な解釈の語りと関連づけられた経験

番号	年齢	性別	現在の所属	解釈に関連づけられた経験	当事者の語り
1	18	女	フリースペース	フリースペースでの生活	いじめにも理由があっただろうし中退も1つの経験になった、あのまま学校にいたらだめになる、あそこだけが学校じゃない
2	18	女	正規雇用	フリースクールでの生活	フリースクールに来て、友だち、先生との関係、これまでの体験を覆してくれるような経験がたくさんできた
4	23	女	派遣雇用	フリースクールでの生活	全部自分のためになった、本当に大事なものが見えてきた、フリースクールで得たものがかなりあった
8	21	男	大学生	—	反省すべき点もあるが、仕方ないことなので転学はプラスだと思っている
9	21	男	大学生	フリースクールへの参加	不登校期間をつくらず、すぐにフリースクールに転学すればよかった、あのままだったら自分らしきを出せず学生生活を終えていたかもしれない
19	25	男	正規雇用	就労の実現、実社会での経験	業種によっては高校・大学への進学は必要がなく中卒のデメリットも感じない、16歳で社会に出て、一般常識に厳しい世界でそれを身につけられた
20	21	女	アーティスト	シンガーという職業との出会い	やめてなかったら歌もできなかった、ちゃんと自分のやりたい方向を見つげられた
32	26	男	大学生	—	遠回りだがトータルでよい方向に進めた

第1のパターンは、高校を中退する前後に経験された困難（特に人間関係）に触れた上で、それに代わる別の場への参加やそこで得られた経験を関連づけながら、中退に対する「肯定的」な語りを形成していくというものである（1、2、4、9）。

「それに代わる場」が、いずれもフリースクール²⁶を指しているのは特徴的である。そして、

²⁶本節でいうフリースクールとは、正確に言えば、フリースクールを設置母体とする通信制高校、あるいは通信制高校を設置する前段階のフリースクール高等部（別の通信制高校の技能連携校）のことである。通信制高校あるいは技能連携校といっても、フリースクールと建物も同じで、在籍者は基本的に毎日通学しており、両者は一体の存在である。そのため、当事者にとっては高校というよりもフリースクールと言った方が自然であり、本節ではその言葉をそのまま用いている。なお、ケース1のみは、フリースクールを母体とする若者のためのフリースペースの利用者であり、フリースクールにも通信制高校にも在籍していない。

そのような場への参加を通して語られるのは、中退経験に対する意味づけの変化そのものである。高校を中退するに至る経緯（やその後の状況）は、当事者にとって「うまくいかなかった」という否定的な歴史の帰結としていったん語られる。しかし、その語りは、フリースクールでの生活を経由することで「肯定的」な語りへと変奏を遂げ、現在に接続されていくのである。

当然のことながら、語りにみられる解釈と当事者をとりまく客観的な現状は密接な関わりを持っている。現在を結末として過去の出来事や経験が取捨選択され、それらが互いに関連づけられながら語りの一貫性が獲得されるとすれば、『『現在』が変わるたびに、物語は書き換えられなければならない』²⁷。そのように仮定すると、第1のパターンに示されるような再解釈の可能性をもたらす場やそこでの経験の中身について、今後さらに分析を進めていく必要があるだろう。

次に、高校生活やそこでの学業に対する「つまらなさ／ついていけなさ」から決別し、新たな進路が切り拓く手段として高校中退を積極的に位置づけ、「肯定的」な解釈の語りを形成していったパターンが確認された（19、20）。それらの解釈は、就労の実現や職場での活躍（19）、目指したい職業との出会いとそれに向けた努力（20）といったように、比較的安定した最近の状況を参照しながら語られている点に特徴がある。

また、特にケース 19 に関しては、高校中退に至る経緯自体が「うまくいかなかった」高校生活から積極的に決別したという「肯定的」な物語になっており、（あくまで語りの上では）その解釈が現在に至るまで一貫している。これは、先のパターンにみられる解釈の変奏とは対照的である。進路形成の実現という「結果」は、中退経験をめぐる解釈全体を大きく書き換えるほどの影響力を持つ経験なのだろうか。この点についても、さらなる検証が必要となる。

なお、ケース 8 及び 32 については、ケースレポートにおける記述から当事者の解釈を支える経験を確定し難かったため、ここでのパターン分析の対象に含めることができなかった。

当事者が自らの中退経験の解釈を語る際、参照され関連づけられるのは中退した後の経験とその中身、そして、現在置かれている状況（への評価）である。「肯定的」な解釈に関連づけられた出来事や経験には、i）困難な高校生活に代わる別の場への参加とそこで得られた経験、ii）高校生活への積極的決別と進路形成の実現といった大きく2つのパターンが抽出された。

②「否定的」な解釈

この分類カテゴリーに含まれるケースは2件のみで（7、18）、ともに「少し後悔している」といった言及にとどまるものであった。では、それらはどのような経験に関連づけられながら形成された語りなのであろうか。表5は、両ケースについて「当事者の語り」と「解釈に関連づけられた経験」とをとりだし整理したものである。

表5 「否定的」な解釈の語りと関連づけられた経験

番号	年齢	性別	現在の所属	解釈に関連づけられた経験	当事者の語り
7	30	男	サポステ通所	就労の困難	現在仕事が見つかりにくいのは中卒という立場のせい、そもそも中卒だというだけで全く仕事がないことに、それはないよと思う
18	17	女	アルバイト	将来への不安、業務上の困難	アルバイトで働いていても中卒だと厳しい、最近になって将来について不安に思うことが多い

²⁷ 野口裕二『物語としてのケア：ナラティブ・アプローチの世界へ』医学書院、2002年

両者に共通しているのは、高校を中退するに至った経緯を「人間関係」の困難との関わりでふりかえった上で、中退の「後悔」を現在の困難な状況や不透明な将来への不安に結びつけて語っている点である。両ケースの調査協力者には年齢上の隔りがある。ヒアリング調査時に30歳であったケース7については、高校中退から14年ほどの歳月が流れているにもかかわらず、自らの中退経験への「否定的」な解釈を「就労の困難」という現状（あるいは展望）との関連で語っている。ケース18に関しても、「将来への不安」やアルバイトにおける業務上の困難（「簡単な計算ができなかったり、領収書を書くときに漢字を書けなかったり」）といった最近の経験が関連づけられていた。

該当ケースが少ないものの、自らの中退経験に対する「否定的」な解釈は、i) 現在、あるいは比較的最近の状況、経験、感覚に結びつけられて語られており、ii) それは（就労の困難をはじめ）将来を見通せない不安定な現状に関連づけられているという特徴を持っている。

(3) ①での分析結果と比較すると、i) 高校生活に代わる、あるいはそれとは異なる別の場への「参加」（例えば、ケース7であれば若者サポートステーション、ケース18であれば児童会館）が未だ自らの解釈の変奏に結びついておらず、ii) 逆に就労や進学といった進路形成の局面で「中卒」という事実が現在の困難な状況に接続されて語りが形成されているという仮説的理解も可能となる。

③「多義的」な解釈

このカテゴリーに含まれるケースについて「当事者の語り」と「解釈に関連づけられた経験」とを抽出し、表6に整理した。一見すると、「多義的」な解釈にはさまざまな経験が関連づけられており、その語られ方もまた様ではないことがみてとれる。では、そのような解釈にどのような経験が関連づけられているかという観点から、パターンの抽出は可能であろうか。今回の分析では、各々の語りを「肯定的」な解釈と「否定的」な解釈とが折り重なったものとして捉え、それぞれについて整理することを通してパターンの抽出を試みた。

表6 「多義的」な解釈の語りと関連づけられた経験

番号	年齢	性別	現在の所属	解釈に関連づけられた経験	当事者の語り
3	19	男	高校生	他者理解・家族関係の深まり ⇔就労の困難、周囲の評価	障がいや母親への理解が深まった、人に優しく接するようになった⇔アルバイト探しや就職で中退は決まっていた印象を与えるものではなく、その履歴も変えられない
5	20	女	看護予備校	進学の実現⇔出産・育児	やめた分「回り道」をしていると考えればいい⇔中退後のすごく大変な人生から、子どもの中退は止めたい
6	20	女	アルバイト	フリースクールでの生活 ⇔就労の困難	フリースクールでの中退経験者との関わりから、中退して良かったと思うようになった⇔次の進路を決めてから中退すればよかった、将来を考えれば中退しなかったかもしれない
10	20	女	正規雇用	別の高校での生活、就労の実現、職場の理解⇔就労の困難	いい学校に出会えてよかったし中退したことで強くなった、職場の上司の言葉で中退が自信になった⇔履歴書に中退と書くのがすごく嫌だった
11	22	女	正規雇用	就労の実現 ⇔就労の困難、周囲の評価	こうして正社員として働いているから何とも思わない⇔大人の目が変わって「だらしない、やんちゃ」とみられ、絶対に不利になるからすすめない／同じ状況に戻ったら絶対にしない
12	19	男	派遣雇用	想定していた進路の断念	全然後悔していないし、この程度の仕事しかないのは理解している⇔中退という事実はマイナスで、夢見ていた専門学校への進学も諦めた

高校中退の軌跡と構造（中間報告）

13	22	女	大学休学中・アルバイト	—	中退あつての今の自分、やめてよかったと思っているのは変わらない⇔中退しなければ別の人生があったかもしれない、苦勞するし他人にはしない方がいいと言う
16	28	男	高校生・アルバイト	別の高校での生活 ⇔就労の困難、周囲の評価	新しい選択肢をつくるための中退だったし、ネガティブな感覚は持っていない⇔周囲から理解を得るハードルは高い、アルバイトや就職ではマイナスだし、社会にはまれなくなる不安感が残る
17	17	女	アルバイト（休職中）	就労の困難、周囲の評価	後悔していないし、今の生活に満足している⇔仕事が見つけないと思うし、中退に対する世間の偏見を感じる
21	22	女	大学生	中退後のいろいろな経験 ⇔家族への負担、進学への影響	中退後の数年は一生懸命でいろいろな経験ができてよかった、無理せずに行ったん休んでみて良かった⇔親に迷惑をかけたと思う、中退しなければもっといい大学に行けた
22	18	女	アルバイト	就労の困難	縛りがなくなった⇔アルバイト探して苦勞して将来に不安を感じる
23	18	女	家事手伝い	就労の困難	煩わしい人間関係から解放された、その後に良好な関係の友人が得られた⇔仕事がなかなか決まらず、中卒では社会に通用しないことがわかった
24	28	女	アルバイト	実社会での経験、就労の実現 ⇔出産・育児	社会に出ていろいろなことを学び、介護職に就けて良かった⇔子どもの親として高校に行っていた方が良かったと思うことがある
25	29	女	アルバイト	実社会での経験⇔就労の困難	人より早く社会に出て学びや出会いが得られた⇔できれば初めから別の高校で看護の資格をとりたかった、正規雇用が難しく社会的に見られ方が全然違う
26	30	女	アルバイト	—	親を助けたいという思いからの行動で、後悔は全くしていない⇔卒業はしておいた方が良く思う
27	21	女	専門学校生	別の高校での生活、 進学の実現、実社会での経験 ⇔就労の困難	中退したことで新たな出会いや経験が得られ、専門学校に進学できた⇔自分の考えが甘かった、就職に向けて履歴書に中退と書くのは気が引ける
28	25	女	アルバイト	家族関係の深まり ⇔周囲の評価、就労の困難、充実した高校生活への憧れ	中退をきっかけに家族と打ち解けられた⇔学歴がないことで社会的に不利な面がある、楽しい高校生活への憧れが残っている
31	19	男	アルバイト	実社会での経験 ⇔充実した高校生活への憧れ	誰よりも早く社会に出ているのでそういう面で逆に負けたくない⇔高校生活でしかできないことができなかった
33	22	男	高校生	別の高校での生活 ⇔就労の困難、周囲の評価	別の高校で多くの人と出会い、自分を支えてくれる人に出会えてよかった⇔就職活動で中卒では仕事がないことを実感した、親戚の中退に対する評価がよくない、中退しなければ大学進学できていた

まず、解釈の「肯定的」な部分は、以下のような経験に関連づけられながら語られていた。
（ ）内は、該当するケース数である。なお、ケース 21 のケースレポートを参照すると、「【F】中退後のいろいろな経験」には「別の高校での生活」、「進学の実現」、「家族関係の深まり」などさまざまな経験があてはまる可能性が読み取れるが、実際の本人の語りにおいて明確な関連づけを特定できなかったため、そのままの表現を用いた。

- | | |
|-------------------------|----------------------|
| 【A】別の高校・フリースクールでの生活（5件） | 【B】進学・就労の実現（4件） |
| 【C】実社会での経験（4件） | 【D】他者理解・家族関係の深まり（2件） |
| 【E】職場の理解（1件） | 【F】中退後のいろいろな経験（1件） |

【A】と【C】は高校中退後に「参加」した場、【B】は高校中退後から現在に至るまでに得られた「進路形成」に関する結果に基づく経験であると言える。大きな傾向としては、（3）①に近い結果が得られていると考える。

「否定的」な解釈の部分に関連づけられた経験としては、以下のようなものが抽出された。
「【G】就労の困難」や「【H】周囲の評価」には、それを本人が直接経験した場合以外にも、将来の展望を考えて「不安」や「焦り」の感覚を抱いたという経験も含めている。

【G】就労の困難（12件）

【H】周囲の評価（5件）

【I】出産・育児（2件）

【J】想定していた進路の断念（1件）

【K】充実した高校生活への憧れ（2件）

【L】進学への影響（1件）

また、「【I】出産・育児」は中退経験に対する「否定的」な解釈との関連づけが読みとりにくいと思われるので、補足を加えておく。それらは、「子を持つ親として、高校を卒業しておくのがよかった」（24）、あるいは、「子どもには、自分が味わった中退後の苦労を味あわせたくない」（5）といったように、出産・育児にともない経験されていく「親」という立場から中退経験に対する「否定的」な解釈が語られたものである。

さて、「否定的」な解釈に関連づけられた経験として、「【G】就労の困難」が該当する件数が際立っている。「【J】想定していた進路の断念」や「【L】進学への影響」を含め、やはり高校中退後の進路形成をめぐる困難な経験が持つ影響は当事者にとって大きいものだと考えられる。現在は正規雇用に至っている2つのケース（10、11）の語りにさえ、類似した中退経験の解釈の揺らぎが持続している点も見落とせないだろう。

この「多義的」な解釈に内在する意味づけの揺らぎは、高校中退という事態を誰にとっての、どのような「問題」と捉えるのかという問いをあらためてつきつけているのではないだろうか。当事者の語りに垣間見える解釈の揺らぎは、「高校中退は悪い、問題のある、避けられるべき事態だ」といった定型的な解釈に基づく「支配的な物語（dominant story）」に収まりきらない、あるいは、それに矛盾した当事者の「生きた経験（lived experience）」の存在を予感させるものである。

たしかに、多くの当事者の理解にも示されている通り、高校中退がその後の進路形成にとって不利な条件となる可能性は高く、実際にその経験が語りを通して確認できる。だが同時に、当事者の解釈の揺らぎには、自らの中退経験を「否定的」な解釈で回収してしまうのではなく、その変わらない履歴の中に「肯定的」な響きを住まわせるべく、「参加」や「人間関係の深まり」といった経験も結びつけていこうとする姿勢が垣間見える。

では、高校を中退してから得られた「参加」や「人間関係の深まり」といった経験を通して、進路形成に向かう力（＝未来を志向する過去の捉え直し）を生みだしていくことは可能なのだろうか。その際に、中退経験のある若者に対する支援実践は何を提供することができるのだろうか。この「多義的」な解釈は、そのような支援実践上の課題も示唆しているように思われる。

（4）小括

本節の分析は、未だ全体的な傾向を示す中間整理の域にあるものだが、ここまでの要点を整理しておきたい。

まず、データ全体を通して、当事者の中退経験に対する解釈は現在、あるいは、最近の状況（に対する本人の評価）が強く反映しているという傾向が読みとれた。さらに、その解釈内容への関連性が高い出来事や経験として、「参加」と「進路形成」が持つ影響が大きいのではないかと考えられた。

具体的には、「参加」という面では、かつての高校生活で得られなかった人間関係や経験、あるいは、その前後における困難を対象化して新しい解釈の語りを紡ぎだすような経験が得られる場にアクセスできたかどうか、解釈の内容を左右していると考えられる。また、「進路形成」とは、進学や就職といった「結果」に関する出来事や経験である。安定した進路形成が実現したり、その見通しが成立したりしている場合は、中退経験はその結果に至るまでの積極的な選択として位置づけられる。対照的に、未だ進路の展望が不透明な状況に置かれている場合は、その原因をさかのぼる形で自らの中退経験がふりかえられて語られていた。

高校中退は、進路形成をはじめ、中退後にさまざまな不利な条件を抱えるリスクが高い選択であることは否定できない。しかし、そのような事態に変化を生みだしていくことは、他でもないその解釈の視点を変えることから出発するのではあるまいか。

このように仮定すると、そのような解釈の視点に変化を生みだした経験の中身について検討することが重要になる。そのような読みかえを可能にする経験を用意する支援実践とはどのようなものだろうか。その際に、本節で仮説的に設定した「参加」と「進路形成」はどのような実践的関連をもつものなのであろうか。

今後、蓄積された膨大なデータの中からより当事者の解釈、それを支えていた出来事や経験の質について、よりつぶさに接近する分析方法を検討しながら、上記の問いに接近していきたいと考える。

第4章 ある高校における中退状況の検討

市原 純・森田 清太郎

1 はじめに

高校の中には、かなり多くの中退者を出しているところがある。そこで、私たちは、高校中退経験者へのインタビューを行うだけでなく、中退者を多数出している高校への訪問調査を行い、高校を中退していく生徒の背景や学校の状況を探ろうと試みた。訪問したのは、道内都市部にある北海道立 X 高校である。以下、同校の Z 教頭からのヒアリングと提供された資料をもとに²⁸、X 高校における高校中退の状況を整理して紹介する。

2 学校の概要

（1）所在地、沿革、規模

今回学校管理職インタビュー調査を実施したのは、北海道立 X 高校（以下、X 高校）である。X 高校は、北海道 A 市に位置している。A 市は人口が多く経済も発展している都市であるが、X 高校の所在地はその A 市の都心から遠く離れた郊外にある。生徒の多くは通学にバスを利用しており、バスによる通学時間は、都心から X 高校まで約 50 分の距離がある。

X 高校は普通科高校であり、開校当初は地域の進学校となることをねらいにしていた。しかし X 高校の場合、開校当初は何の進路実績も持っておらず、さらに都市郊外に位置している立地条件の悪さもあってか、開校してすぐに学区内の偏差値序列としては下位に位置づいてしまう。その後も X 高校は、偏差値序列のピラミッドの中では最底辺にあたるような高校として、地域内での地位が固定されていった。さらに後述するように、生徒の問題行動が多い荒れた高

²⁸ 他に、同校を取り上げた新聞記事も参照した。

校として、次第に地域の中で評判となってしまう、悪い印象を抱かれるようになっていった。

X 高校の学校規模は、開校当時は 1 学年あたり 10 クラスという大規模な高校としてスタートした。しかし、その募集定員に対して入学者数は年々減少していき、平成 22 年度では 1 学年あたり 6 クラスの規模となっている。平成 22 年度における教職員数は 60 名（学校事務職員も含む）である。

（２）生徒数、生徒の居住地

X 高校の平成 22 年度現在の生徒数は、表 7²⁹の通りである。

全生徒数は 549 名であるが、学年が進むに連れて生徒数が減少しているのは、学年を経る毎に退学者数が増加しているためである³⁰。

平成 22 年度における生徒の居住地は、表 8 の通りである。

表7 X高校の生徒数

学年	組	計
1年	男子	123
	女子	122
	計	245
2年	男子	111
	女子	79
	計	190
3年	男子	65
	女子	49
	計	114
全校	男子	299
	女子	250
	計	549

（平成22年4月9日現在）

表8 X高校の生徒の居住地（X高校からの提供資料を元に市原が作成）

居住地	1年	%	2年	%	3年	%	合計	%
所在地区	115	47%	94	49%	68	60%	277	50%
近隣地区①	47	19%	30	16%	17	15%	94	17%
近隣地区②	16	7%	13	7%	3	3%	32	6%
その他計	67	27%	53	28%	26	23%	146	27%
計	245	100%	190	100%	114	100%	549	100%

（平成22年5月現在）

全生徒数 549 名のうち、X 高校の所在地区からの通学者が 277 名となっている。さらに、X 高校の近隣地区である、ふたつの地域からの通学者がそれぞれ 94 名、32 名となっている。これらを併せると、X 高校の近隣に住む地元通学者の割合が、全体の 4 分の 3 近くを占めていることがわかる。なお、北海道教育委員会は、平成 22 年から学区の区域を変更して

おり、X 高校の第 1 学年が入学した年度から、X 高校の属する学区は以前よりも広がって、ほぼ A 市内全域の生徒が X 高校を受験できるように条件が変更された。その第 1 学年の生徒の居住地を見ても、これまでの入学者の傾向とほぼ変化なく、地元通学者の割合は高いままである。

Z 教頭によると、この地元通学の割合の高さについて、家庭の経済的な事情が影響している。通学費を抑えるために、地元の高校として X 高校を選択するようなケースが多い。そのほか、地元通学以外の生徒も 3 割近くを占めるが、これらの中には中学校時代にいじめ等を経験していて、生徒に顔見知りがない高校として、地元から離れた X 高校をあえて選択しているようなケースも含まれている。

（３）生徒の状況

X 高校の生徒の状況について、Z 教頭は以下があくまで個人的な見立てであると前置きしつつ、次のように語ってくれた。

まず、生徒の状況として挙げられるのは、地域の偏差値序列最下層の高校として、学力の低い生徒が多い点である。小中学校の時点で学習についていけなかった生徒は非常に多い。そして、いじめられた経験や不登校の時期を過ごしたことで、人とのコミュニケーションを苦手な

²⁹ X 高校からの提供資料を元に、市原が作成。

³⁰ 第 1 学年は 245 名なのに対し、第 3 学年が 114 名と半減以上の差があるのは、入学者数にも差があった点にも留意。平成 22 年度の入学者数が 245 名なのに対して、グラフ 1 の通り平成 20 年度の入学者数は 200 名である。

している生徒も多い。人間関係の中での不適応に関する障がい³¹を持った生徒の割合も多いが、人数が多いために、そういった傾向を持つ生徒たちの間で友人関係が形成され、学校生活の表面上では目立たなくなるような状況もある。

現在の X 高校では生徒募集の際、小中学校での勉強は苦手であったが学び直したいと思っている生徒や、学習意欲はあるが偏差値の関係で受けることのできる高校がほとんどなく、私立高校には学費が高くて行けないような状況にある生徒を、積極的に受け入れると呼びかけている。こういった呼びかけに応じて入学し、勉強をやり直そうという気持ちを持ち、学校の学習に意欲を示す生徒も、X 高校には多数いる。しかし、と Z 教頭は次のように語る。

実際には、(勉強を) 学び直したい、やり直したい（と思っている）生徒と同時に、「高校なんか行かなくても良いんだ、俺なんかどうせ」っていう生徒が、(中学校の教員に)「まあおまえ、だまされたと思って（入学試験を）受けてみろや」だとか、(親に)「頼むからあんた、高校ぐらいは行って」って言われて、「しょうがねえなあ、じゃあ（入学試験を）受けてみっか」と言ってお受けてみて、受かっちゃった、で、(X 高校に) 入ってみたけど、「やっぱりうるせえ先生ばかり多くて、やってられねえや」っていう生徒も、多数入ってきております。(Z 教頭ヒアリング)

すなわち Z 教頭によると、X 高校の生徒には、二種類の生徒層が混在している。ひとつめが「学ぶ意欲のある生徒」であり、学校の学習には意欲や関心を持つことができるものの、過去の学校生活で何らかの躓きの経験を持っていたり、人間関係の結び結に苦手さを有している生徒たちである。もうひとつが、「学ぶ意欲のない生徒」であり、過去も現在も学校の学習への意欲や関心が薄く、学校生活に対しては無気力さが目立ち、逸脱行動を起こしがちな生徒たちである。

(4) 家庭の状況

X 高校の生徒の家庭の状況について、Z 教頭は以下もあくまで自分個人の見立てであって、必ずしも正確な事実とは言えないと前置きしつつ、次のように語ってくれた。

ひとり親家庭の割合は 4 割ほど、生活保護世帯は約 3 割である。授業料免除の家庭の数は、「けっこう」な数に上る³²。概して、子育てに関心を向ける余裕も失われているような、生活の苦しい家庭が多い。

なお、X 高校の生徒の授業料滞納率はこれまで高めであったが、平成 21 年度には授業料滞納防止のための取り組みを強化しており、その年の滞納率は過去に比べて大幅に減少した。

(5) 生徒の卒業後の進路

X 高校の平成 21 年度卒業生の進路は、表 9 の通りである。

表9 X高校の平成21年度卒業生の進路決定状況（X高校からの提供資料を元に市原が作成）

	進学			進学計	就職		就職計	その他	合計
	大学	短期大学	専修学校		民間	公務員			
男子	5	1	24	30	10	2	12	29	71
女子	1	3	16	20	5	0	5	30	55
合計	6	4	40	50	15	2	17	59	126
%	5%	3%	32%	40%	12%	2%	13%	47%	100%

（平成22年3月31日現在）

³¹ 発達障がい、例えば ADHD や自閉症などであると思われる。

³² 授業料免除について Z 教頭は、ヒアリングの事前に正確な数字を確認しておく予定だったが間に合わなかったと述べており、ここでは Z 教頭の「授業料免除も、けっこういます」という語りを、そのまま表記しておくに留める。

全卒業生 126 名のうち、大学進学者（短大含む）は 10 名と 1 割にも満たず、非常に少ない。専門学校進学者は 40 名と全体の 3 割ほどを占める。Z 教頭によると、生徒の中には経済的な事情で進学費用が用意できずに高等教育進学を諦めるケースもあるが、奨学金等を活用すれば進学できるのに、その情報が生徒・家庭にうまく行き届かず、進学を断念しているようなケースも潜在しているという。

X 高校の卒業生では就職するケースが少なく、17 名と全体の 1 割程度である。Z 教頭によると、X 高校の就職内定率（＝就職希望者に占める就職決定者の割合）は 3 割弱であり、北海道の高卒就職内定率の平均が 7 割であるのに比べると、就職を希望しながら採用に至らないケースも X 高校では比較的多い。

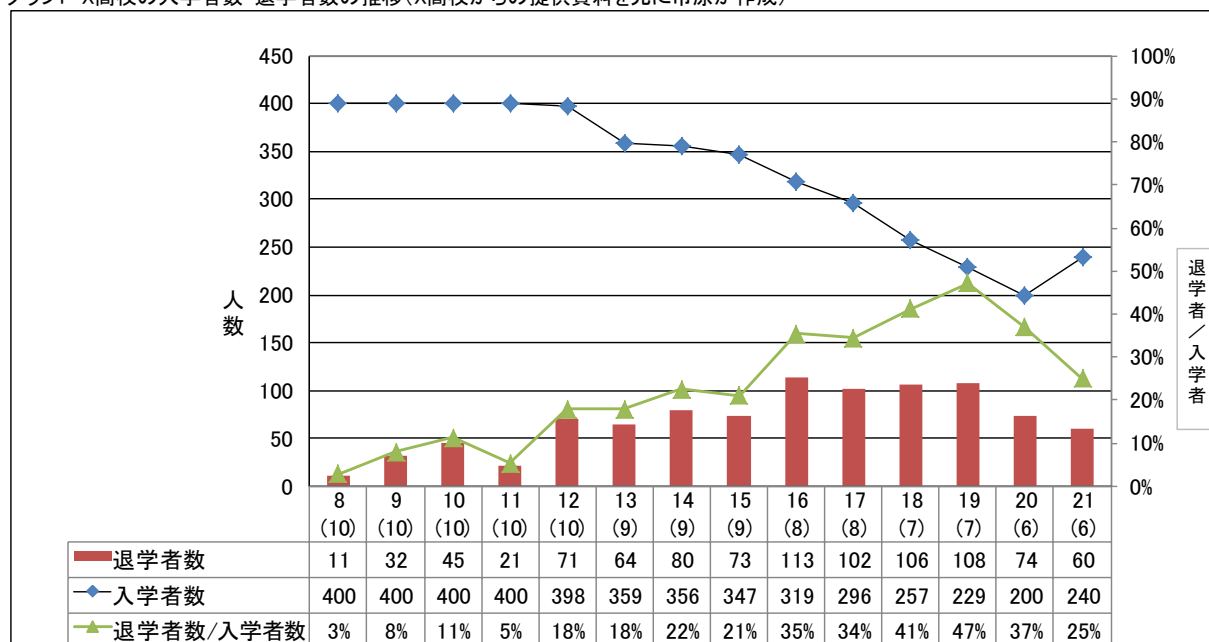
そして、X 高校の平成 21 年度の進路未定者（＝表 9 の「その他」のカテゴリーに該当）は、59 名となっている。進路未定者が、卒業生全体の半数弱を占めている。この平成 21 年度の卒業生について、進路未定者のその後の状況を確認しようと X 高校で追跡調査を試みたが、連絡を取ることができたのは 59 名中 4 名のみで、ほとんどの進路未定者と連絡を取ることができなかった。

3 中退者数の推移と背景、対策の取り組み

（1）中退者数と入学者数の推移

X 高校の中退者数の推移とそのプロセスを以下で説明するために、入学者数の推移のデータも併せてここで紹介する。X 高校の入学者数と退学者数の推移はグラフ 1 の通りとなっている。

グラフ1 X高校の入学者数・退学者数の推移(X高校からの提供資料を元に市原が作成)



(平成22年5月21日現在)

まず、グラフ 1 の退学者数の推移を確認すると、開校から年々中退者数が増加し、平成 16 年度でピークを迎えていることが分かる。平成 16 年度から平成 19 年度までの 4 年間は連続して 100 名以上の中退者数を出している。

一方、入学者数の推移を確認すると、開校当初は 1 学年 10 クラスの 400 名という募集定員を設定していたが、平成 13 年度に 1 学年 9 クラスでの募集、その 3 年後の平成 16 年度には 1 学年 8 クラスによる募集と、徐々に募集定員が下げられていった。しかし入学者の低下傾向は

留まらずに続いていき、そのピークとなった平成 20 年度には 10 年前の半分、1 学年 5 クラス分に当たる 200 名の入学者数にまで減少していった。

その年度の入学者数を退学者数で割ったパーセンテージで見ると、100 名以上の中退者数を出すことになった平成 16 年度以降は特に高い数値を示しており、平成 20 年度までは常に 30%を超えている。最も高い数値が出ていた平成 19 年度では 47%となっており、これはその年の入学者数の約半数に当たる数の生徒が退学していくという状況を示している。

（２）中退者数増加のプロセス

この間のプロセスについて、Z 教頭によると以下のような経緯があったという。

先述のとおり、X 高校は開校当初、普通科高校として地域の進学校になることをねらいにしていたが、偏差値序列のピラミッドの中では最底辺にあたるような高校として、地域内での地位が固定されていった。入学希望者の減少に伴い、募集定員に対して入学希望者が満たない、いわゆる「定員割れ」の事態が到来することになった。定員割れの事態の到来は、明確な目的意識もなく入学してくる生徒たちの数の増加を意味することとなった。

そんな中で徐々に大きな問題として表面化していったのが、生徒指導上の問題であった。煙草の喫煙などの問題行動が地域からの悪評を呼び、それが更なる入学希望者数の減をもたらすという悪循環が、この頃からはじまったという。煙草の喫煙などの問題行動を減少させるため、学校側としてそういった問題行動に厳しい処分を行う方針を採るも、その処分に起因する停学者、ひいては中退者の増加が、地域から更なる悪評を生む要素となった。

平成 16 年度には中退者が 100 名を超す事態となり、この頃の数年間が、悪循環のピークであった。当時の校内の荒れの状況は非常に深刻で、1 日で見つかる煙草の吸い殻は 100 本以上にも上った。間断なく続く生徒の問題行動に、当時の教員達の間では敗北感、無力感が漂っていた。平成 18 年度に北海道の地方議会議員が視察に来た際は、その議員から「もう X 高校は廃校を検討すべきではないか」という意見が述べられるほど、深刻な事態となっていた。

以上のように、中退者数の増加の勢いが加速していく一連のプロセスを、X 高校は経験してきた。

（３）平成 19 年度における対策の取り組み

X 高校が本格的に中退問題の対策に乗り出したのは、平成 19 年度であった。この年に新たに赴任した校長が指揮を取り、生徒指導上の問題や高校中退問題に対応するための具体的な取り組みが開始された。例えば、全校生徒へアンケート調査を実施し、「喫煙する人は嫌いだ」との回答が多数を占めたアンケート結果を生徒に配布して、喫煙する一部の生徒の行動を黙って見ていた生徒が多くいることを校内に周知したり、教員向けに想定される場面ごとの詳細な指導マニュアルなどが作成された。冬休み明けには喫煙追放の取り組みに本格的に乗り出し、教員 5、6 人でチームを組んで校内を巡回し、喫煙が疑われた生徒の全員から徹底して事情を聞き取り、持ち物検査を実施した。

以上のような生徒指導の取り組みを、平成 19 年度以降も継続することによって、校内に落ち着きが生まれるようになった。中退者数も、過去 4 年間継続していた 100 名以上の大台を切り、平成 20 年度は 74 名、平成 21 年度は 60 名と、減少傾向にある。しかし数は減少したにせよ、未だに多数の中退者数を出している現状があることも、また事実である。

（４）現在の取り組みとその考え方

そこで X 高校では、以上のような生徒指導上の取り組みで下地を整えつつ、現在はその下地

の上で、授業改善や校内の居場所づくりの取り組みにも力を入れようとしている。

平成 21 年度から、学び直しの授業を導入している。国語・数学・英語の科目で実施し、それぞれの生徒の必要に応じて、小中学校の基礎的なレベルにまで戻って学ぶことのできる授業を行っている。教員側としては、授業において生徒がどの時点で躓いているのかを把握し、その学習段階ではどのような内容の学びが必要であるのかを順次判断して教えることのできる力量が問われるため、そのための教員たちの力量向上を高校全体で図ろうとしている。さらに現在では、おもしろい授業の導入も課題に掲げ、各教員らがそれぞれで工夫して取り組んでいる。

また、校内における居場所づくりの取り組みも意識して重点的に行っている。具体的には、部活動の勧誘、委員会、生徒会などの課外活動に力を入れている。また平成 22 年度からは、放課後に基礎的な内容についての講習も開始している。放課後には生徒がほとんどおらずに校内が寒散としていた以前のような状況も、現在ではやや改善されつつある。

以上のような授業改善や居場所づくりの取り組みと並行して、生徒指導の取り組みにも依然として力を入れている。Z 教頭によると、「あれはだめ、これはだめ」とはっきり生徒に告げるような指導も重要であるが、しかし、本来は教員が生徒のことをしっかりと理解し、その教員の指導によって生徒自身の自己指導能力（＝自分で自分を律する力）が身につくような生徒指導が望ましいと、Z 教頭は語っている。Z 教頭の言葉では、ルールを厳格に適用していく指導を「消極的な生徒指導」と呼び、生徒理解に基づく指導を「本来の生徒指導」と呼んでおり、生徒指導を二種類に区別して、実践上では両者とも必要になるが、とりわけ後者の実現を目指されなければならないとしている。

なお、高校中退と生徒指導との関係については、Z 教頭によると、教員側の本音として、色々な問題行動を起こす生徒が自ら「中退したい」と申し出たならば、そのまま辞めてもらった方が、学校全体の指導の状況は改善する面があることも真実であるという。生徒の問題行動が連鎖していき、そうして引き起こされる校内の荒れの被害を受けて、新たに生徒たちが中退していくような事態を、教員たちは防がなければならない。しかしその一方で、教員たちが問題行動を引き起こすような生徒たちへ厳格にルールを適用し、処分を厳しく行ってその生徒たちを高校から追い出すような方針を取っていると、中退せずに高校に残っている生徒たちからも、教員たちは信頼を失ってしまうような事態を招くことが、十分にあり得る。教員が、生徒に対して公平に関わり、ひとりひとりの生徒のことを理解しようと丁寧に接することにより、生徒との信頼関係は生まれるものであり、「この部分において生徒たちは非常に敏感」であるという。したがって、高校中退を防ぐという観点から見ても、ひとりひとりの生徒にきちんと目を向け、それぞれの生徒のことを理解しようと公平に丁寧に接していく「本来の生徒指導」が、やはり重要になる。

Z 教頭によると、そもそも高校中退への対策は、「問題行動を防ぐために生徒に対して厳しく処すること」と、「その生徒が高校中退に至らないようにすること」という、本来は矛盾するような二つのことを同時に行うような取り組みにならざるを得ない。教員は生徒に対して、システマチックに突きつけなければいけないものは淡々とした態度で突きつける必要もある一方で、ギリギリまでその生徒の傍で粘って「最後まで頑張れ」と働きかけ続ける姿勢も非常に重要であり、「この二律背反的な姿勢を演じるのが学校の、ひいては教員の役割である」と、Z 教頭は語っている。

なお、生徒が教員の生徒指導の方針に従ってくれたとしても、その指導に従うことで得るこ

とのできる利益が何ものなければ、生徒にとっては「文句も言わずに黙って先生の言うことを聞くこと」と「無意味な時間を学校で嫌々過ごすこと」という、二重の苦痛を感じてしまうことになる。生徒が中退せず高校に留まるならば、こんな利益を得ることができる、というものを生徒に提示するための取り組みとして、授業改善や居場所づくりの取り組みが位置付けられていると、Z 教頭は語ってくれた。

そのほか、中退対策の取り組みとして、平成 21 年度には養護教諭が全校生徒一人一人に対して面談を行った。クラス担任の教員には生徒が打ち明けていなかった事情を養護教諭が把握でき、校内における生徒理解に役立ったという。さらに、高校中退者を減らすために、研修の機会などを用いて、生徒理解を重視しようという共通認識を教員集団全体に持たせるための取り組みを、できるだけ設けるようにしている。そして、様々な生徒への理解を深めるために、とりわけ人間関係に不安を抱えている生徒に対しては、週 1 回来校するスクールカウンセラーが、生徒本人にカウンセリングを実施したり、あるいは教員とカウンセラーの間でそういった生徒への対応に関する協議の時間を持つようにしている。

4 個々の中退の実態

（１）中退者数と中退事由の把握

以下では、X 高校における高校中退の状況の、個々の実態やその把握の方法についてふれていく。全国の高校中退者数と高校中退事由の内訳は、国の公式統計として毎年示されているが、それは毎年度それぞれの高校から教育委員会を通じて文科省へと状況の報告がなされ、文科省はそれらを集約し、「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」の統計資料として、その結果を発表している。X 高校では、校務分掌で担当となった教務の担当教員が、それぞれのクラス担任教員から、各クラスの中退者数とその中退事由の内訳を確認して集約し、報告資料を作成して年度末に教育委員会へと提出している。グラフ 1 に示した中退者数の数値は、この報告資料に基づくものである。中退事由の内訳は、統計の区分に基づいて、中退者ひとりにつき事由をひとつだけ選択する。以上で述べてきたように、それぞれの高校中退の中退事由の判断は、中退者が在籍していたクラスのクラス担任教員が行っていることになる。

（２）中退事由の内訳と中退者の類型

ここで、X 高校における高校中退の中退事由の内訳について確認する。Z 教頭によると、中退事由で最も多いのは「学校生活・学業不適応」であり、全体の 6, 7 割を占める。次に多いのは「進路変更」で、就職へと進路希望を変更するものが多い。中退事由は以上の 2 つがほとんどであり、それ以外の中退事由での中退は統計上あまり多くない。

なお、Z 教頭によると、「学校生活・学業不適応」と「進路変更」は、両者の区別がほとんどつかないようなケースが、実際はほとんどである。先述のとおり、統計上の都合から中退事由を複数回答ではなくひとつだけ選択するため、どちらが中退するにいたる主因であったかをクラス担任の教員が判断して選択することになる。しかし、例えば学業で不適応を起こしたので、高校を辞めて働きたいと本人が述べているようなケースを、どちらに分類するかは、一概に判断し難いものである。このように、クラス担任の教員にとって、実際はどちらが主因であったかを判定し難い微妙なケースも多く、クラス担任の教員それぞれが持っている判断基準に最終的には委ねられている。

したがって、公式統計のために X 高校が毎年報告している中退事由の内訳は、便宜上の区別

がなされているという程度のものであり、実態としてはその区別にあまり大きな意味はない。X 高校の場合、ケースによって濃淡はあるものの、多くの高校中退者が「学校生活・学業不適応」の事由から高校を去っていく状況にあると、ひとまずは言えるのかもしれない。

それではここで、Z 教頭の語りから、X 高校の高校中退者の類型について確認してみる。Z 教頭によると、X 高校の高校中退者は、大きく 2 つのタイプに分けることができるという。1 つ目は、もともと集団の中での規律やマナーを守ることができず、高校入学後も学校生活での逸脱行動や学業での不適応を起こして中退していくタイプであり、これを Z 教頭は「従来型」と呼ぶ。2 つ目は、X 高校について入学前に持っていた自分のイメージと、実際に入学してから体験した X 高校の現実との間にギャップを感じて、学校生活や学業で不適応を起こして中退していくタイプであり、これを「後発型」と Z 教頭は名づけている。そして、「割合としては多いのが、『従来型』」であると Z 教頭は述べている。

（４）中退する局面の実態

最後に、X 高校における高校中退者が中退していく局面の具体的な実態について、Z 教頭の語りを確認する。まず、高校側が強制的な退学処分を行うことは、めったにない。それを行う場合は、かなり明確な反社会的行動、例えば傷害などの犯罪を起こして他の生徒の安全を守れないような危険性がある場合においてのみであり、そのようなケースはほとんどない。多くの場合は、生徒や親と教員との話し合いの中で、最終的に生徒側から退学願を届け出る自主退学という形を取る。

そして、中退する生徒のほとんどの場合は、出席日数不足による留年決定を経て、高校中退に至るという。Z 教頭によると、中退するような生徒は、授業にも参加しようとせず、教員の指導にも従わないために、遅刻や欠席が増えていく。そして出席日数の不足で進級ができなくなり、留年するか退学するかを選択を迫られて、最終的に中退することを決断することになる。

5 まとめ

X 高校は、一時期はその年の入学者数の約半数に当たる数の高校中退者を輩出するほど、高校中退が続発していた高校であった。その基底には、やはり生徒の抱える困難が存在していることが確認できる。低学力の生徒や人間関係を取り結ぶ上でも困難を抱えている生徒が多く、また家庭も、ひとり親家庭や生活保護世帯の割合が高いことに象徴的に表れているように、経済的にまた子育て面において余裕のない状況にある。地元通学者の多さも、通学費を抑えなければならない家庭の経済的な事情が関連していると見られる。生徒の家庭の状況も、X 高校の近隣地域が厳しい状況に置かれており、その地域の厳しさが X 高校の高校中退の状況にも影響を与えているものと想定される。本章冒頭の調査課題にもどれば、家庭背景に何らかの不利を抱えた生徒が多く、そうした生徒たちが高校を中退している状況がまず確認できる。

しかし、同校の中退者数に増減があることは見逃せない。偏差値ランクの低位と地理的不利を背景とする「入学希望者の減少」→『「学ぶ意欲のない生徒」の増加』→「喫煙に代表される逸脱行動の悪化」→「地域からの悪評の高まり」→「入学希望者の減少」という悪循環に陥り、その過程の中で X 高校の中退者は急増していった。しかし、同校は、その後ルールを厳格に適用していく「消極的な生徒指導」を一時期徹底して行い、逸脱行動の増加を押し留めて秩序回復をはかっていった。また、授業改善や校内での居場所づくりの取り組みなどを展開して、生徒たちが高校へ通学し続けることを意義のあるものとして感じられるような環境づくりを目指す

す取り組みも開始した。こうした取り組みのもとで、同校の中退者数は一定の減少を始めている。このことは、高校中退が、生徒の家庭的背景の問題だけでなく、学校がどのような生徒指導方針を採るか、生徒のニーズに応えられるような教育実践をいかに展開できるかによって影響を受けることを意味する。

X 高校への訪問調査では、中退の個別の要因や生徒が退学に至る詳細な過程については聞き取っていない。しかし、この調査から得られたこれらの知見は、本稿のケース分析の結果と照応するものといえよう。

終章 中間総括

伊藤 健治

1 中間報告のまとめ

本調査の対象となった中退経験を持つ者たちは、中退に至るプロセスで各々に異なる背景を持っており、中退後の進路や生活の状況も実に多様であった。そのため、高校中退の問題を単一の視点から捉えることは適切ではない。すでにみてきたように、中退に至るプロセスには複数に要因が重なりあっており、家庭の経済的理由や教育困難校の問題だけでは中退者が抱える現実の困難を的確に捉えられることはできない。また、中退後についても不安定な就労状況にある者ばかりではなく、およそ半数の者が高校等に戻って学び直しをしており、さらに大学等へ進学する者も一定の割合を占めている。この事実も中退の問題を考える上で、見逃すことは出来ないであろう。

しかしながら、このように多様な状況の背後には、階層的な要因を中心とした家庭の状況による影響が、なお大きく作用している様子が浮かび上がってきた。つまり、中退の理由として経済的要因が直接的に語られたいくつかケースの他にも、家庭の経済的な困難が背景として存在しているケースが数多くみられた。このとき、当人からは高校中退と家庭の問題が切り離されて語られることが多く、家庭の問題の見えにくさが現れていた。また、語られた中退理由としては、友人やクラスでの人間関係、管理主義的な学校や教師への不信、問題行動や学業不振、本人の病気や妊娠の発覚など、様々な理由があげられていた。これらは貧困が中退を引き起こすというような単純な図式ではなく、経済的事情や家族関係などの家庭環境が不安定な状態にあることで、学校生活や友人関係などでのトラブルに対する耐性も弱まっており、そこに幾つかの契機が積み重なって中退に至っていると考えるべきであろう。

また、その一方で、学校教育における課題も明らかになってきた。高校を卒業することなく去っていた者達は、その多くが学校に通い続ける目的を見出すことができなかった。さらに、高校を自分にとって無用とまで感じていた者もいた。彼／彼女たちの多くは、小中学校から学びへの関心が持てないまま低学力にとどまり、学力を中心とした学校的価値観において疎外されてきたと考えられる。中退経験をふり返って「中退して良かった」と肯定的に語る者が何人もいた背景には、中退した高校における学校経験の貧しさがあり、中退して初めて既存の学力的価値では計れない豊かな経験ができたからである。このような状況は、学校の在り方や教育内容に疑問を投げかけるものであろう。つまり、学校教育における課題とは、どのように学びを保障するかであり、学校生活によって将来の展望を描いていけるような教育が求められていると言えよう。

さらに、本調査からは、高校中退に関する支援の問題も明らかになってきた。家庭の階層的な影響からも明らかなように、中退に至る過程での支援は、高校での教育の在り方を考えるだけでは不十分であり、福祉的な視点からの支援と連携していく必要がある。また、中退後の進路は、様々な人や社会とのつながりを契機として形成されていた。しかし、そこでも家庭状況に規定された側面が強くみられ、豊かな資源を持つ家庭ほど様々な支援とつながりやすく、厳しい状況の家庭ほど社会的な関係性が限られてしまい、進路を形成するための支援も得られにくい。これは不利が折り重なっていく状況でもある。つまり、中退に至る段階から影響する家庭の状況は、中退後に学び直す機会をも制約し、就労の道へ進めば不安定な就労状況に置かれやすく、将来の展望を描くために助けとなる支援も十分に届いていないのである。このような高校中退経験者たちの現状に対して必要な支援を進めていくためには、高校中退の問題を社会的な構造として捉えていく必要がある。

2 今後の課題

本調査は、高校中退経験者を対象としたインタビュー調査によって、高校中退の軌跡と構造を明らかにすることを課題とするものであるが、今回の報告は未だ中間段階にある。

調査には多くの者が参加し、個々の聞き取り結果については事例検討を行った上で、議論と修正を繰り返しながらケースレポートとしてまとめてきた。また、第3章の分析編においては、調査メンバーが班に分かれて各観点からの検討を重ね、担当執筆者を中心に分析を行ってきた。それぞれの班の分析については、担当者間での調整を図りながら進めてきたが、整合性が不明瞭な部分が残し、相互の絡み合いに関する検討も不十分なため、節毎の独立性が高いものとなった。今後、ケースの解釈や分析の内容に関して、更なる検討が必要である。また、第2章でみたように、調査の対象者に偏りがみられることも課題であり、高校中退問題の全体像を捉える上では、今回の調査結果に基づきながらインタビュー調査を継続する必要がある。しかしながら、本調査では、中退に至る要因やプロセスだけでなく、中退後の進路や生活までの一連の軌跡を一定程度明らかにすることによって、高校中退の構造的な問題背景の一端を垣間見ることができたと考える。本調査で少しずつ明らかになってきたような高校中退経験者の現実の状況から、高校中退問題の構造を捉えること、また、どのような支援が必要なのかを検討していくことが今後の課題である。

〔付記〕本調査の実施にあたって、快くインタビューに応じていただいた高校中退経験者や北海道立X高校の方々をはじめ、インタビュー対象者を紹介していただいた方々など、多くの方からご協力をいただきました。ここに記して厚くお礼申し上げます。

※本調査は、2010年度北海道大学教育学部授業「教育行政学調査実習」として実施したものである。また、本調査チームには、横井敏郎（北海道大学教育学部准教授）を代表者として、宮崎隆志（同准教授）、杉山晋平、市原純（同教育学部博士課程3年）、伊藤健治、横関理恵（同博士課程1年）、新谷康子、津田紗希子（同修士課程1年）、清原健（同教育学部4年）、家坂朱、池野純、岩井良介、笠島沙喜、倉田桃子、小坂恭平、小林なつみ、谷口知弘、福岡諒、福田沙也佳、森田清太郎（同教育学部3年）が参加した。